出雲市駅前白枝線街路事業地内

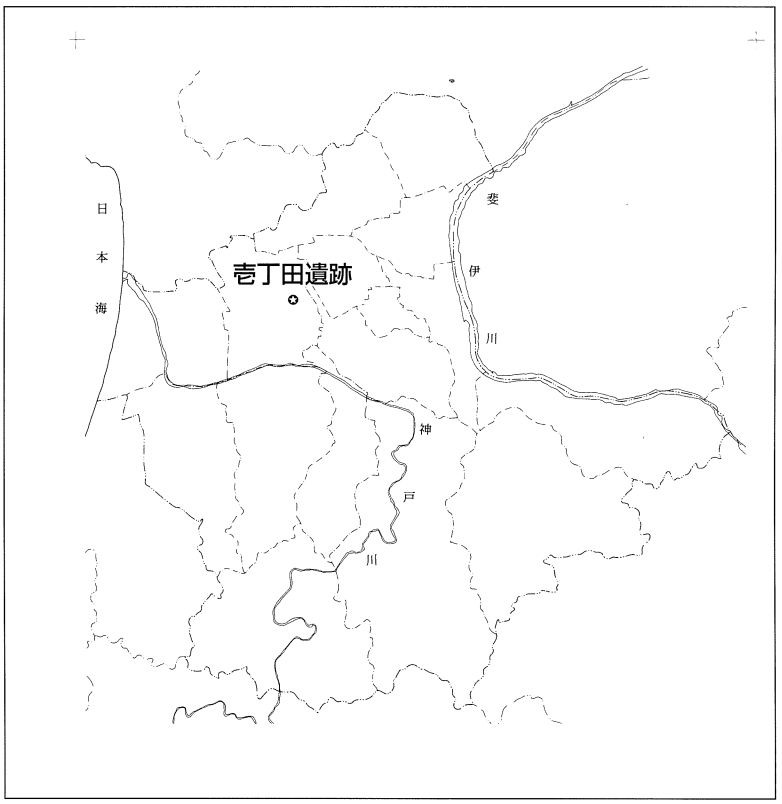
壱丁田遺跡発掘調査報告書

1998年3月

出雲市教育委員会

出雲市駅前白枝線街路事業地内

壱丁田遺跡発掘調査報告書



壱丁田遺跡の位置図

1998年3月

出雲市教育委員会

はじめに

出雲市高松地区は、市内でもどちらかと言えば遺跡が少ない地域です。それは、『出雲国風土記』に記されているように、高松地区一帯が「神門水海」に広く覆われていたことと大きな関連があります。

しかし、「神門水海」周辺の微高地上には白枝荒神遺跡や天神遺跡などが所在し、生活に適した地域であったことが知られています。

壱丁田遺跡は、これまで遺跡としては知られていなかった地域でしたが、今回の出雲市駅前白枝線街路事業に伴って遺跡の一部を発掘調査した結果、古墳時代の遺構や近世の墓地などが検出されたことは、この地域における人々の生活の起源を探るうえでも貴重な発見となりました。

本書はその報告書ですが、郷土の歴史をひもとく鍵として広く活用されれば幸いに存じます。最後に、発掘調査にあたり、ご指導、ご協力を賜りました関係者の皆様に心からお礼申し上げます。

平成１０年３月

出雲市教育委員会

教育長　多　久　　博

例　　言

1．本書は、出雲市都市整備課の委託を受け、出雲市教育委員会が平成７年度に実施した出雲市駅前白枝線街路事業に伴う壱丁田遺跡発掘調査の報告書である。

2．発掘調査は、下記の期間において実施した。
平成７年（1995）１１月１日～平成８年（1996）３月２８日

3．発掘調査を行った地番は、次の通りである。
出雲市白枝町字壱丁田 455番地ほか

4．調査は、次の組織で行った。
平成７年度
〔調査指導者〕　広江　耕史（島根県教育委員会文化課主事）
〔事　務　局〕　伊藤　　薫（都市整備課長）、野津　建一（文化・スポーツ課長）
〔調　査　員〕　岸　　道三（文化・スポーツ課主事）
平成８年度
〔調査指導者〕　岩橋　孝典（島根県教育委員会埋蔵文化財課主事）
〔事　務　局〕　大野　　努（都市整備課長）、後藤　政司（文化振興課長）
〔調　査　員〕　岸　　道三（文化振興課副主任主事）
平成９年度
〔調査指導者〕　岩橋　孝典（島根県教育委員会埋蔵文化財課主事）
〔事　務　局〕　後藤　政司（文化振興課長）
〔調　査　員〕　岸　　道三（文化振興課副主任主事）、高橋　智也（同　主事）
　　糸賀　伸文（同　臨時職員）、石橋　弥生（同　臨時職員）

5．本書で使用した遺構略号は、次の通りである。
ＳＤ－溝、ＳＫ－土坑、Ｐ－ピット、ＳＸ－落ち込み状遺構

6．本書で使用した方位は磁北を示す。

7．本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。

8．本書掲載の遺物実測図及び写真撮影については、岸が大部分行ったが、一部については高橋、糸賀、石橋が行った。

9．本書の執筆・編集は、上記調査員の協力を得て岸が行った。

10. 発掘調査及び遺物整理にあたり、次の方々に御指導、御協力を賜った。

西尾　克己（島根県教育委員会埋蔵文化財課主幹）、柳浦　俊一（同　文化財保護主事）
岩橋　孝典（同　主事）、鳥谷　芳雄（島根県埋蔵文化財調査センター主幹）
椿　　真治（同　文化財保護主事）、広江　耕史（同　文化財保護主事）
守岡　正司（同　主事）

11. 発掘調査にあたっては、次の方々に従事して頂いた。

佐藤　保信　　鐘推　蔵吉　　片山　　修　　米山　清司　　山田　恭代　　成相　律子
森脇　　宏　　大森長一郎　　原　　昭枝　　杉原　嘉二　　鎌田　　悟　　小白金廣巳
馬庭　　繁

12. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事して頂いた。

吹野　初子　　鵜口　令子　　遠藤　恭子　　飯國　陽子　　川谷　真弓　　太田　和子
荒木恵理子　　石川　桂子　　佐藤　三鈴　　岡野　和栄

本　文　目　次

はじめに
例　　言
本文目次
挿図目次

Ⅰ．位置と環境 …… 1
Ⅱ．調査に至る経緯 …… 3
Ⅲ．Ａ区の調査 …… 5
　１．Ａ区の概要 …… 5
　２．遺構と遺物 …… １０
Ⅳ．Ｂ区の調査 …… １７
　１．Ｂ区の概要 …… １７
　２．遺構と遺物 …… １８
Ⅴ．Ｃ区の調査 …… ２６
　１．Ｃ区の概要 …… ２６
　２．遺　物 …… ２６
Ⅵ．Ｄ区の調査 …… ２９
　１．Ｄ区の概要 …… ２９
　２．遺構と遺物 …… ３０
Ⅶ．Ｅ区の調査 …… ５５
　１．Ｅ区の概要 …… ５５
　２．遺　物 …… ５５
Ⅷ．ま　と　め …… ５７

図　版 …… 図版１～図版１２

挿　図　目　次

Ⅰ．位置と環境

第１図　壱丁田遺跡周辺の遺跡 ……1

Ⅱ．調査に至る経緯

第２図　試掘トレンチ堆積土層図 ……3

第３図　試掘トレンチ位置図 ……3

第４図　調査区位置図 ……4

Ⅲ．Ａ区の調査

第５図　Ａ区遺構配置図 ……7・8

第６図　Ａ区堆積土層図（ａ6 ～ａ9）…9

第７図　ＳＫ０１・ＳＸ０１実測図 ……10

第８図　ＳＸ０２実測図 ……11

第９図　ＳＫ０２実測図 ……12

第10図　遺構外出土遺物実測図　(1) ……13

第11図　遺構外出土遺物実測図　(2) ……14

Ⅳ．Ｂ区の調査

第12図　ＳＸ０１・ＳＸ０２実測図 ……18

第13図　Ｂ区遺構配置図 ……19・20

第14図　ＳＤ０５実測図 ……21

第15図　出土遺物実測図（遺構内）……22

第16図　遺構外出土遺物実測図 ……23

Ⅴ．Ｃ区の調査

第17図　Ｃ区堆積土層図 ……26

第18図　出土遺物実測図 ……27

Ⅵ．Ｄ区の調査

第19図　ＳＸ０３実測図 ……30

第20図　ＳＸ０３出土遺物実測図 ……30

第21図　Ｄ区遺構配置図 ……31・32

第22図　ＳＫ０３実測図 ……33

第23図　工事中出土遺物実測図(1) ……33

第24図　工事中出土遺物実測図(2)
（古銭）……35

第25図　ＳＫ０６実測図 ……36

第26図　ＳＫ０６出土遺物実測図 ……36

第27図　ＳＤ０５・ＳＤ０６実測図 ……37

第28図　ＳＤ０６出土遺物実測図 ……38

第29図　土器群１実測図 ……38

第30図　土器群１出土遺物実測図(1) ……39

第31図　土器群１出土遺物実測図(2) ……40

第32図　遺構外出土遺物実測図(1) ……42

第33図　遺構外出土遺物実測図(2) ……44

第34図　遺構外出土遺物実測図(3) ……45

Ⅶ．Ｅ区の調査

第35図　Ｅ区堆積土層図 ……55

第36図　出土遺物実測図 ……56

Ⅰ. 位置と環境

(1) 位　置（第１図）

壱丁田（いっちょうだ）遺跡は、山陰屈指の規模を有する出雲平野のほぼ中央、出雲市白枝町字壱丁田に所在し、平成６年に都市計画道路「出雲市駅前白枝線」街路事業に伴う試掘調査によって新たに発見された遺跡である。

『高松村誌』[1] によれば「壱丁田」という字名は、「此の辺に上小路・中小路・下小路の三小路が北へ通じ、丁は町にして豪族の木戸等に名づくるを例とせり。一町歩程の田という名に非ざるべし。」と記されている。

付近の集落遺跡としては、南には弥生時代から近世に至るまでの大複合集落遺跡として知られる

第１図　壱丁田遺跡周辺の遺跡

1. 壱丁田遺跡　2. 白枝荒神遺跡　3. 小山遺跡　4. 矢野遺跡　5. 大塚遺跡　6. 石臼古墳　7. 山持川川岸遺跡　8. 鳶ケ巣城跡　9. 平林寺山古墳群　10. 膳棚山古墳群　11. 大寺古墳　12. 荻杼古墓　13. 斐伊川鉄橋遺跡　14. 西谷墳墓群　15. 塚山古墳　16. 今市大念寺古墳　17. 平家丸城跡　18. 角田遺跡　19. 天神遺跡　20. 神門寺境内廃寺　21. 上塩冶築山古墳　22. 築山遺跡　23. 上塩冶横穴墓群　24. 大井谷城跡　25. 地蔵山古墳　26. 半分古墳　27. 半分城跡　28. 三田谷Ⅰ遺跡　29. 小坂古墳　30. 刈山古墳群　31. 古志本郷遺跡　32. 大梶古墳　33. 放れ山古墳　34. 栗栖城跡　35. 浄土寺山城跡　36. 正蓮寺周辺遺跡　37. 田畑遺跡　38. 妙蓮寺山古墳　39. 宝塚古墳　40. 地蔵堂横穴墓群　41. 知井宮多聞院遺跡　42. 福知寺横穴墓群　43. 小浜山横穴墓群　44. 山地古墳　45. 上長浜貝塚　46. 出雲大社境内遺跡　47. 原山遺跡　48. 菱根遺跡

天神遺跡、北には弥生時代を中心とした遺跡として知られる白枝荒神遺跡がある。しかし、壱丁田遺跡付近の東西には遺跡は確認されていないことから、天神遺跡から白枝荒神遺跡へと南北に伸びる同じ微高地上に壱丁田遺跡も立地していると言える。なお、付近には古墳は存在していない。

(2) 歴史的環境

出雲平野をとりまく地形には、北に北山山麓、南に中国山地から派生した丘陵地が連なり、東には宍道湖、西には日本海がある。この宍道湖と日本海にはそれぞれ斐伊川、神戸川が注いでおり、出雲平野はこの二大河川によって形成された沖積平野となっている。

しかし、中世以前の出雲平野の景観は、現在とはかなり異なっていたようである。現在は東流して宍道湖に注いでいる斐伊川は、当時は西流して『出雲国風土記』に記されているように、入海のような状況を呈していた潟湖（現在の神西湖）に注いでいたようである。このような環境のもと、壱丁田遺跡は神戸川の北岸、入海の河口に近い自然堤防上に占地しており、『出雲国風土記』が書かれた頃までは、少なくとも同様な景観であったと考えられる。

出雲平野における遺跡の初現は、平野の北にある菱根遺跡（大社町）、西の砂丘下にある上長浜貝塚が知られており、縄文時代早期末の遺物が確認されている。これに続く遺跡としては、縄文時代前期末から中期にかけての上ヶ谷遺跡（斐川町）が知られているが、その他では確認されていない。

縄文時代後期・晩期になると、平野の北に出雲大社境内遺跡・原山遺跡（大社町）が営まれるほか、南の丘陵下にある三田谷Ⅰ遺跡、平野中央部の矢野遺跡・蔵小路西遺跡からも遺物が確認されている。

弥生時代には、矢野遺跡・姫原西遺跡や三部竹崎遺跡（湖陵町）などで前期の遺物が確認されているが、規模は小さい。しかし、中期中葉以降、入海周辺の沖積地に集落が飛躍的に拡大し、天神遺跡・古志本郷遺跡・正蓮寺周辺遺跡などの大集落遺跡が営まれ、その拡大は古墳時代前期にまで及んでいる。また、弥生時代後期には四隅突出型墳丘墓６基を含む西谷墳墓群が斐伊川に近い南の丘陵上に築造され、この頃にはある程度共同体的結合が図られて首長の権力が強大になってきたことが窺える。

古墳時代になると、中期の遺跡や古墳は少ないが、後期後半には今市大念寺古墳・上塩冶築山古墳・地蔵山古墳など、横穴式石室を有する大規模な古墳が築造される。また、南の丘陵斜面には上塩冶横穴墓群・神門横穴墓群など大規模な横穴群が築かれる。しかし、これら古墳の被葬者を支える基盤となったであろう大集落遺跡は、現在のところ確認されていない。

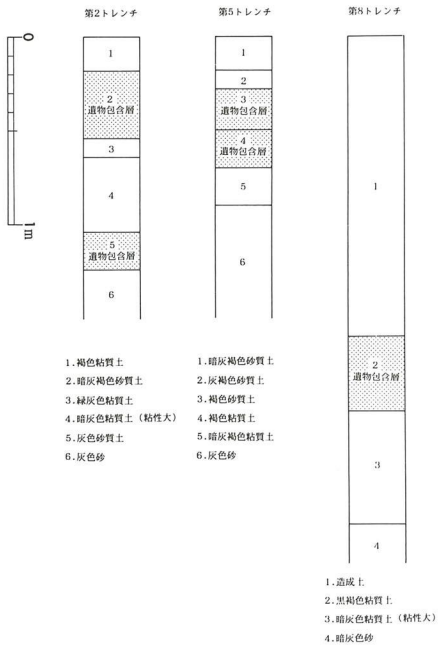
奈良時代にも遺跡は点在しているが、あまり詳しいことはわかっていない。一方、この時期になると神門寺境内廃寺・長者原廃寺などの私寺が建造されるとともに、小坂古墳の石櫃や朝山古墓・菅沢古墓などの初期火葬墓があり、いち早く仏教文化が取り入れられていたことが窺える。

中世の遺跡は、各地で井戸や建物跡などの遺構が検出されてはいるが、集落としては部分的なものが多く、あまり詳しいことはわかっていない。その中にあって、矢野遺跡では14～15世紀にかけての溝で区画された屋敷地が発掘されており、蔵小路西遺跡・姫原西遺跡からは中世の木棺墓が発見されている。

Ⅱ．調査に至る経緯

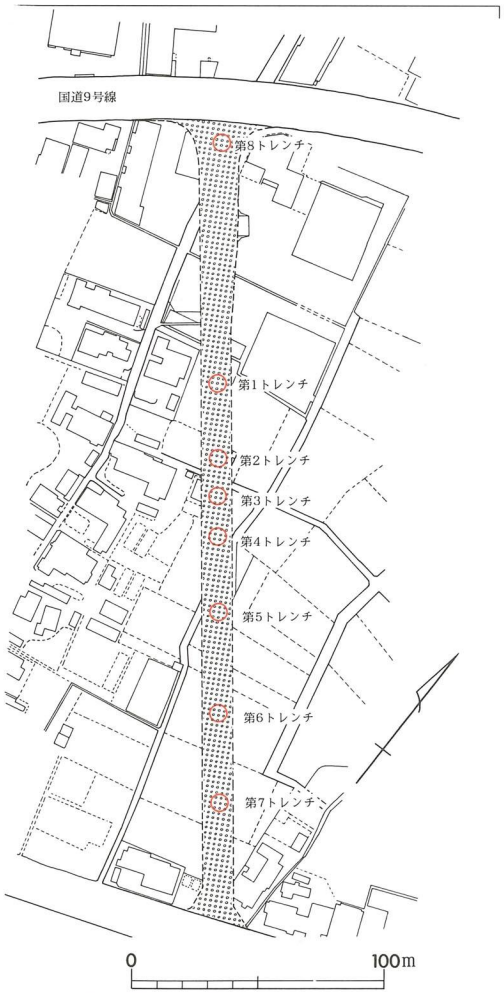
平成６年（1994）10月、出雲市都市整備課より都市計画道路「出雲市駅前白枝線」街路事業予定地における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地は、周知の遺跡とはなっていなかったが、付近には天神遺跡や白枝荒神遺跡といった大集落遺跡が存在する位置環境から、試掘調査によって遺跡の有無を確認することとした。

試掘調査は、用地買収の都合上、平成７年（1995）１月23日から２日間、同年７月10日の２回に分けて行った（第３図)。その結果、事業予定地の南側に設定した第６・第７トレンチからは遺物・遺構とも検出されなかったが、その北側に設定した第１～第５トレンチ及び第８トレンチからは遺物が発見された（第２図)。なお、第２トレンチでは土師器や中世末の陶磁器、第５トレンチでは土師器や須恵器を中心に検出している。



第２図　試掘トレンチ堆積土層図

試掘調査の結果から、事業者である出雲市都市整備課と出雲市教育委員会、島根県教育委員会の三者で協議を重ね、第５トレンチから第８トレンチにかけての全長約200ｍの区域を発掘調査することで合意した。そして、調査期間は平成７年（1995）11月から平成８年(1996)３月までとすることを確認した。なお、事業予定地内における既設舗装道路は発掘調査の対象外としている。



第３図　試掘トレンチ位置図

発掘調査に至る手続きについては、まず、新発見遺跡であることから、遺跡発見の通知（文化財保護法第57条の６）を平成７年３月31日付で文化庁長官へ提出し、当該地の字名から壱丁田遺跡として通知した。また、事業者である出雲市都市整備課からは、同年７月31日付で埋蔵文化財発掘の通知（同法第57条の3)が提出された。出雲市教育委員会ではこれを受け、埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第98条の2)を同年８月10日付で文化庁長官へ提出している。

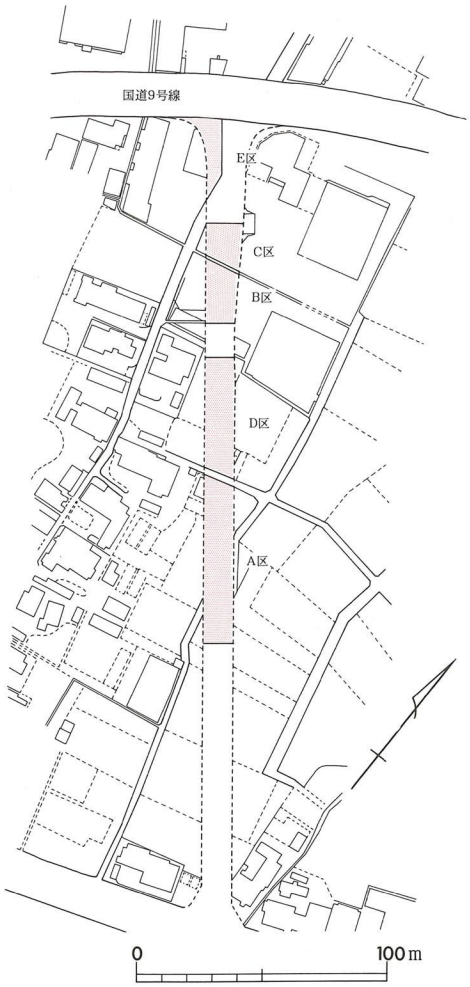
発掘調査は、平成７年(1995)10月から準備を進め、同年11月１日から開始した。調査地点は、便宜上、道路や水路などで区分し、南からＡ区・Ｄ区・Ｂ区・Ｃ区・

E区とした（第４図）。

各区の調査面積は、Ａ区が東西７ｍ×南北40ｍの280㎡、Ｄ区が東西約8.5ｍ×南北約15ｍの約130㎡、Ｂ区が東西６ｍ×南北約16ｍの約90㎡、Ｃ区が東西６ｍ×南北約10ｍの約60㎡、Ｅ区が東西５ｍ×南北約10ｍの約50㎡で、総発掘調査面積は、約610㎡である。

調査区のＡ区・Ｄ区については現状が水田であったが、試掘調査によって確認された水田耕作土を約20㎝ほど重機で取り除き、排土した。またＢ・Ｃ・Ｅ区は駐車場として利用されており、約１～1.5ｍの盛土がしてあったため、重機によって盛土を取り除き、排土した。その後、各区に東西、南北とも５ｍ間隔（Ｂ区は６ｍ間隔）のグリッドを設定した後、南側から順次調査を進めていった。そして、冬の寒さとＣ区・Ｅ区については水処理に悩まされながらも、平成８年(1996)３月28日に調査を終了した。

なお、調査終了後に埋蔵文化財発見届（遺失物法第13条)、埋蔵文化財保管証をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。



第４図　調査区位置図

註

(1)　『島根県斐川郡高松村誌』　高松クラブ　1981年（1941年復版）

Ⅲ．Ａ区の調査

１．Ａ区の概要

Ａ区は、調査区の中で最も南側に位置する。調査に入る前に、東西、南北とも５ｍ間隔のグリッドを設定し、南からＡ１～Ａ８Grとし、その西側にも東西２ｍ×南北５ｍの小グリッドを設定して南からａ１～ａ８Grとした。そして、試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの水田耕作土を約20㎝ほど重機によって排土した。なお、Ａ区の調査面積は、東西７ｍ×南北40ｍの 280㎡である。

層　序（第５図・第６図）

調査区での層序は、ほぼ同じ様相を示している。水田耕土の下は、基本的には灰褐色土、褐灰色土、暗灰色土と堆積しており、灰オリーブ色砂質土に達する。なお、調査区南側の一部ではやや異なる堆積を示しているが、これは、土地改良以前にあった用水路跡と考えられ、新しい時期のものである。そして、北側には近年まで民家が存在しており、ａ８・Ａ８Grの上層はかなりの攪乱を受けている。

また、遺構の検出状況や遺物の出土状況から推測すると、灰オリーブ色砂質土上面に堆積する層は、遺構が築かれた後の時期に、何度か削平を受けたものと考えられる。

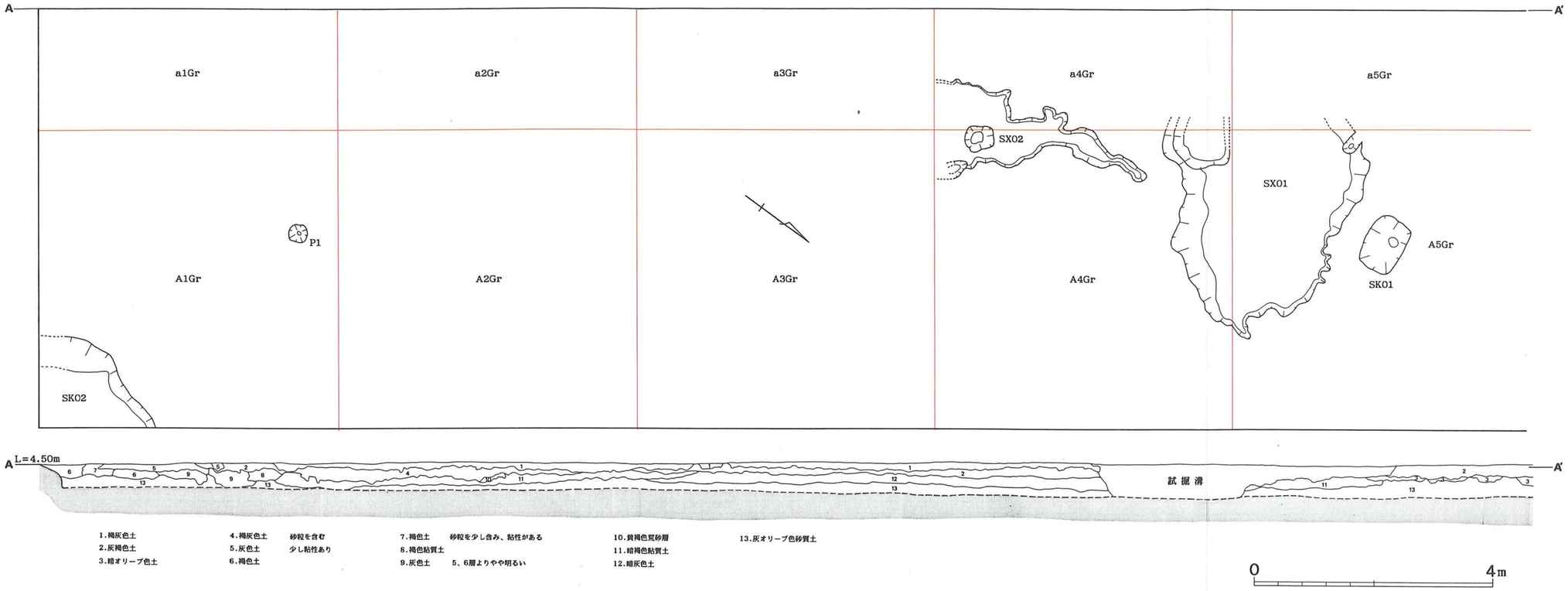
遺　構（第５図）

遺構は、全て灰オリーブ色砂質土の上面で検出している。調査区のほぼ中央で落ち込み状遺構を２検出しているが、この２つの遺構は、ＳＸ０１が試掘溝に切られ、ＳＸ０２については南側が土地改良以前の用水路によって切られ、明確なプランを検出することができなかった。また、ＳＸ０１の北側で土坑状の遺構を１（ＳＫ０１）、調査区の南側でも土坑状遺構を１（ＳＫ０２）検出しているが、これらの遺構には、遺物をほとんど含まないうえ、細片が多く、時期については不明である。なお、その他には遺構は確認できなかった。

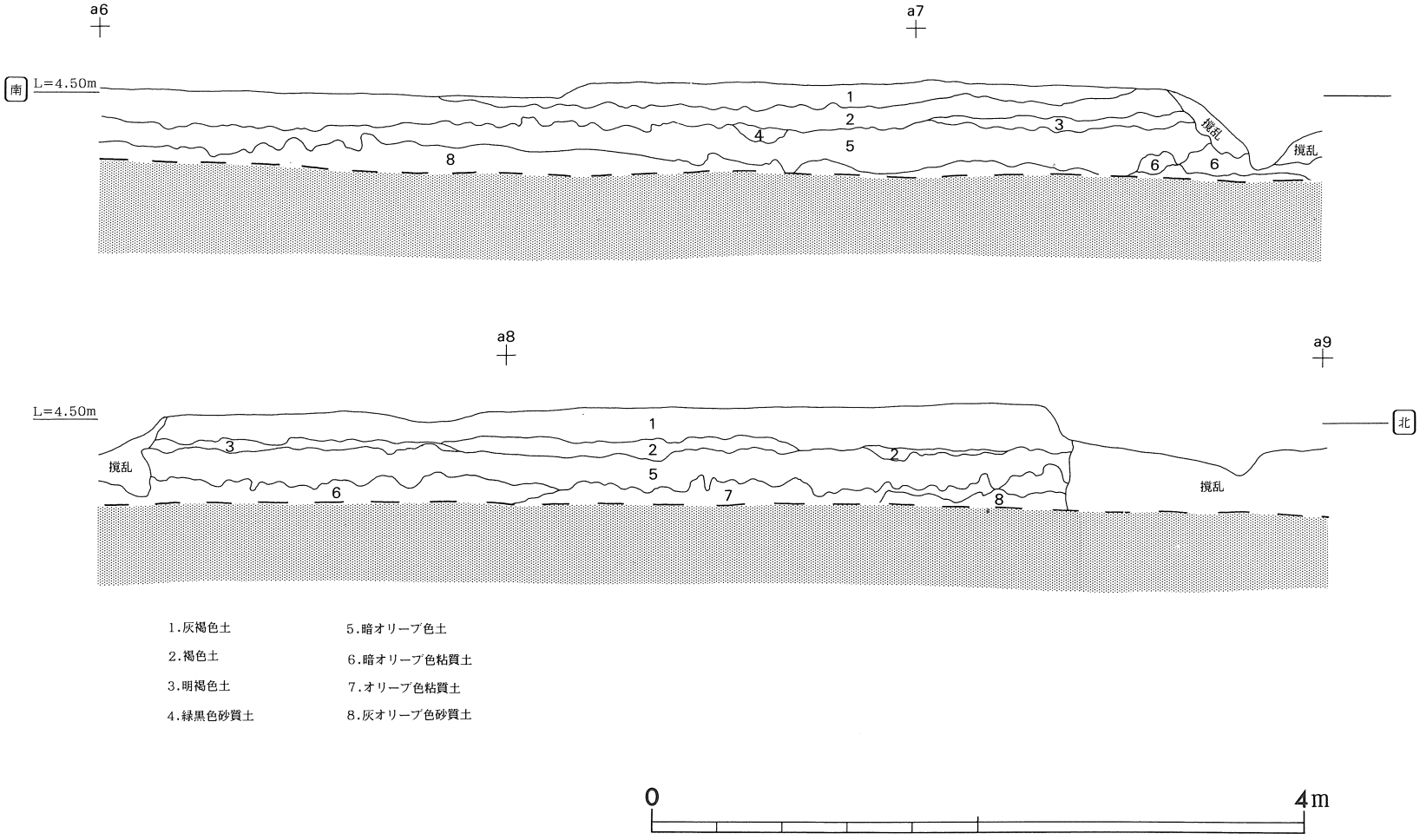
遺　物

遺物は、灰オリーブ色砂質土上面に堆積している灰褐色土、褐灰色土、暗灰色土の全ての層に包含しており、須恵器、土師器、陶器を中心に出土している。特に、暗灰色土は比較的安定した遺物包含層となっており、古墳時代後期から奈良時代にかけての須恵器、土師器を多く包含している。

遺物のうち、最も古い時期のものとして、布留甕が１点出土しているのが注目される。また、中世の土師器、近世の唐津焼なども出土しており、古墳時代から近世に至るまで連綿と集落が営まれていたことが窺われる。


A
A'
a1Gr
a2Gr
a3Gr
a4Gr
a5Gr
SX02
SX01
P1
A1Gr
A2Gr
A3Gr
A4Gr
A5Gr
SK01
SK02
L=4.50m
試掘溝
1.褐灰色土
2.灰褐色土
3.暗オリーブ色土
4.褐灰色土　砂粒を含む
5.灰色土　少し粘性あり
6.褐色土
7.褐色土　砂粒を少し含み、粘性がある
8.褐色粘質土
9.灰色土　5、6層よりやや明るい
10.貧褐色荒砂層
11.暗褐色粘質土
12.暗灰色土
13.灰オリーブ色砂質土
0
4m

第5図　A 区 遺 構 配 置 図



第6図　A区堆積土層図（a 6～a 9）

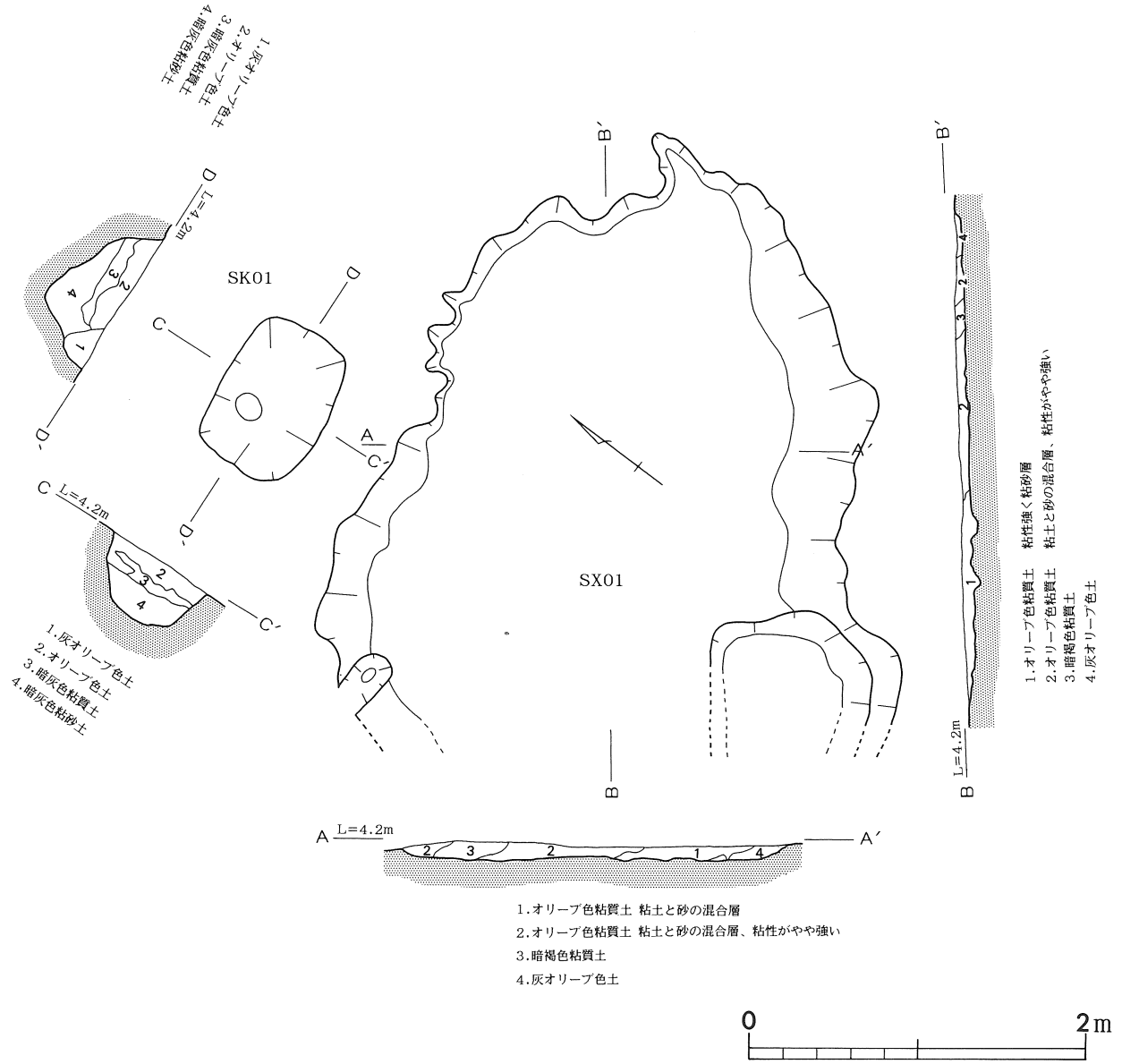
2．遺構と遺物

ＳＫ０１（第７図）

調査区のほぼ中央、Ａ５Grの灰オリーブ色砂質土上面で検出した土坑状遺構である。平面プランは東西長92cm、南北長66cmを測り、東西に長い楕円形を呈する。なお、検出高は標高4.2mである。

覆土には、上層からオリーブ色土、暗灰色粘質土、暗灰色粘砂土と堆積しており、地山である灰オリーブ色砂質土に達する。断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて底面はやや丸く作り出しており、最深部までの深さは約40cmである。

遺物は、土師器の高坏と考えられる細片が１点出土しているのみであり、遺構の時期、性格については不明である。



第７図　ＳＫ０１・ＳＸ０１実測図

ＳＸ０１（第７図）

Ａ４～Ａ５Grの灰オリーブ色砂質土上面で検出した落ち込み状遺構であり、40cmほど北にはＳＫ０１が位置している。遺構の西側は試掘溝によって切られており、明確なプランを確認することはできなかったが、現状では東西最大幅3.4m、南北最大幅3.5mを測る。なお検出高は標高4.13mである。覆土には、オリーブ色粘質土や暗褐色粘質土などが堆積しており、底面はほぼ平坦に作り出している。深さは約10cmと浅いが、上面は削平を受けているため、本来はもう少し深さがあったものと考えられる。

遺物には土師器、須恵器の細片が少量出土しているにすぎず、時期的判断に耐えないものが多い。しかし、須恵器高台付坏には、高台部の断面が四角形を呈するものがあり、奈良時代～平安時代にかけて築かれた可能性が高いのではないだろうか。

遺構の性格については、出土遺物が少ないうえ、形状も明確でないため不明である。

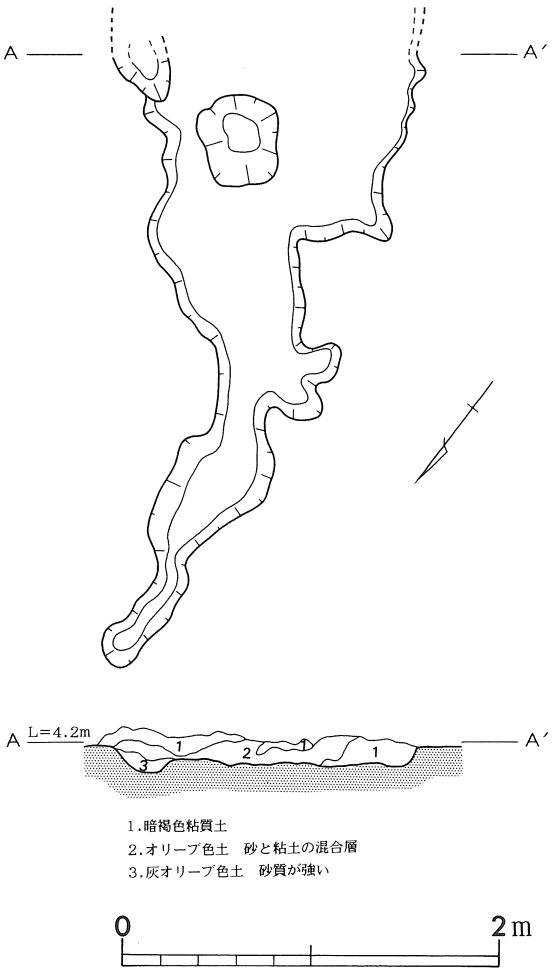
ＳＸ０２（第８図）

ａ４GrからＡ４Grにかけて、灰オリーブ色砂質土の上面で検出した落ち込み状遺構で、南側は土地改良以前の水田用水路によって切られているが、現状では最大幅1.6m、長さ3.4m以上を測り、北側は幅が狭くなり、すぼまっている。検出高は標高4.18mである。

覆土には、オリーブ色土や灰オリーブ色土が堆積しており、最大幅付近での断面の形状は、両肩からやや鋭角に落ち、底面はほぼ平坦に作り出している。最深部までの深さは約18cmであるが、ＳＸ０１と同様に上面は削平されているため、本来はもう少し深さがあったものと考えられる。

遺物は、２点の細片が出土しているにすぎないが、いずれも土師質で、平安時代以降のものと考えられる。遺構が築かれた時期的判断は難しいが、覆土はＳＸ０１とよく似ており、同時期に築かれた可能性が強い。

遺構の性格については、出土遺物、形状からは判断できず、不明である。



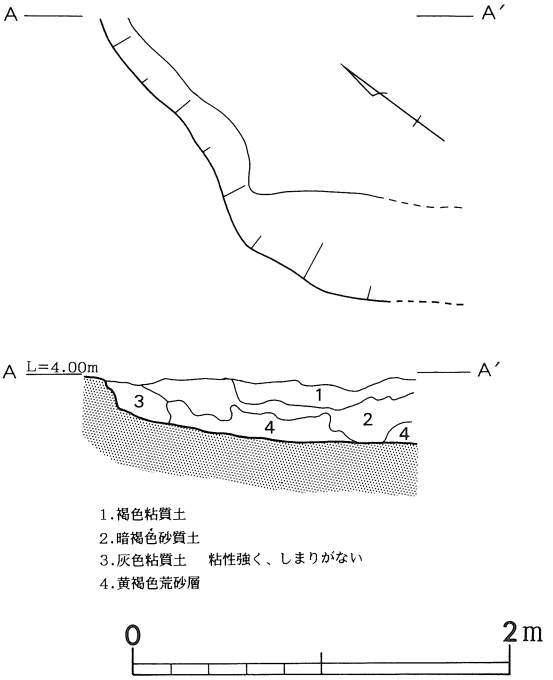
第８図　ＳＸ０２実測図

SK02（第9図）

調査区の南、灰オリーブ色砂質土上面で検出した土坑状遺構であり、東側と南側は調査区外へ達している。検出長は東西約1.05m、南北約1.60mを測り、検出高は標高3.98mである。

覆土には粘質土や砂質土が堆積しており、最下層は黄褐色荒砂層となっている。断面の形状は、肩部から約45度の角度で落ちて、底面は調査区外へ向かってなだらかに落ちていくようである。

遺物は全く出土しておらず、遺構の時期、性格については不明であるが、底面付近は水位が高く、かなりの湧水があることが注意される。



第9図　SK02実測図

遺構外の出土遺物（第10図・第11図）

A区では遺構に伴う遺物は少ないが、包含層中からは古墳時代から近世に至るまでの遺物が出土しており、特に灰オリーブ色砂質土の上層に広く堆積している暗灰色土に多くの遺物を包含している。

第10図－1は布留甕の口縁部と考えられる。やや内湾ぎみに立ち上がり、口縁端部は内傾している。この遺物は、全調査区のうちでも時期的には最も古い遺物で、4世紀後半から5世紀初頭にかけてのものであろう。

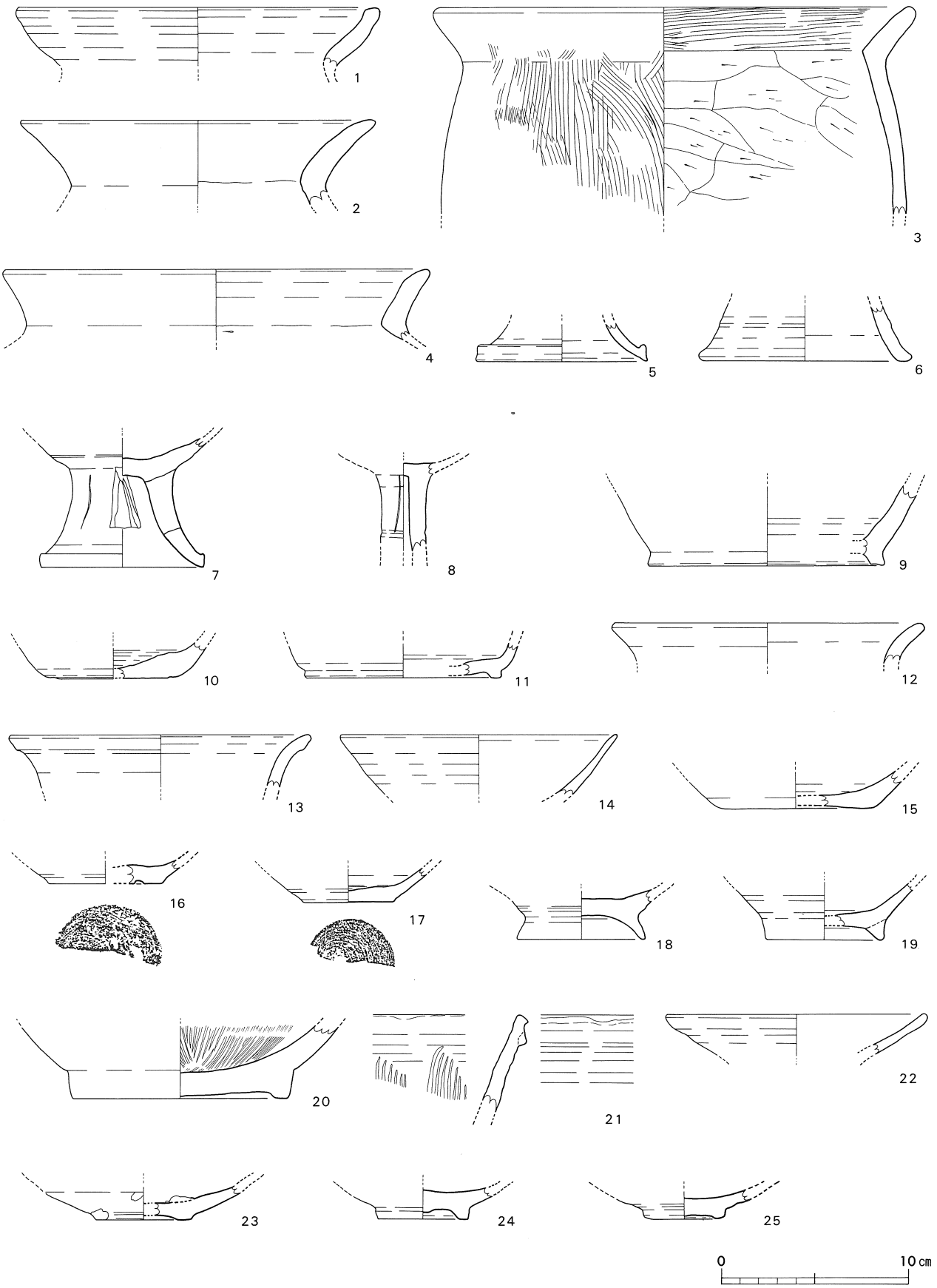
2～4は土師器甕である。2は口縁端部がやや外反して細くなり、丸くおさめている。3は頸部から口縁部にかけてゆるく屈曲し、頸部下の外面は縦方向のハケ、内面はケズリによる調整が行われている。なお、内面にススが付着していることから、竈である可能性もある。4は、2と同様に口縁端部はやや外反して細くなり、丸くおさめている。

5～8は、須恵器の高坏である。5・6は脚部の破片であり、5は脚端部が上方に突出し、6は突出せず、丸くおさめている。7は、脚部に三角形の透し孔が2、線状の切れ込みが1ヵ所に認められ、脚端部を上方に突出させている。また、器高はさほど高くはならない。このような高坏は、高広編年[1] ⅡB期に相当する資料で、6世紀末から7世紀初頭頃のものであろう。8は筒部の破片で、2段の透し孔を有するものであろう。時期は7よりも古く、大谷編年[2]の出雲3期に相当する資料であろう。

9は、高台を有す須恵器壺の底部である。高台部は直立し、断面は四角形を呈する。10は須恵器甕、あるいは坏の底部である。底部は回転糸切りにより切り離され、「＼」印が刻まれている。11は須恵器高台付の坏、あるいは椀で、高台部の断面は四角形を呈している。

12・13は須恵器甕の口縁部である。12は口縁端部を丸くおさめ、13は口縁部に段を有し、稜をなしている。

14・15は土師器坏である。いずれも土師質で、14は外面に回転水引き痕が残る。いずれも平安期以降のものであろう。

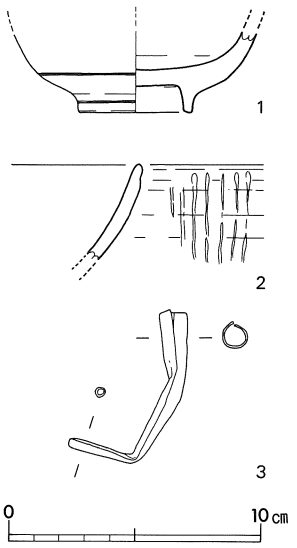


第１０図　遺構外出土遺物実測図　(1)

16・17は、色調は土師器に近いが硬質であり、焼成不良の須恵器坏と考えられる。底部は回転糸切りにより切り離され、17は底部から体部にかけて大きく「ハ」の字状に開き、外面底部から体部にかけてはススが付着している。いずれも平安期以降のものであろう。

18・19は、土師器足高高台付坏である。18は高台部が大きく外傾し全体に粗雑な作りで、色調は暗褐色を呈している。19は高台部が短く外傾するが、外観上は直立に近いものである。以上のような坏は、市内藤ヶ森(ふじがもり)遺跡[3]（Ⅰ地点）でも多量に出土している。

20・21は近世の陶器擂鉢である。20は高台を有し、内面には非常に密な擂目が入り、重ね焼の痕跡が認められる。21は片口を有す擂鉢で、口縁部付近に突帯を貼付けている。



第11図
遺構外出土遺物実測図 (2)

22～25は唐津焼の皿、あるいは埦である。22は、内面と外面上半部に緑灰色の釉がかかる。23は高台を有して内面と外面上半部に淡緑色の釉がかかり、内面には重ね焼の痕跡が認められる。24は高台を有し、全面に乳白色の釉がかかっている。25は外面高台部を除く全面に白色の釉がかかっている。これらの唐津焼は、その特徴から17世紀前半頃の資料と考えられる。

第11図－１は陶胎染付の埦である。高台を有し、全面に淡緑色の釉がかかり、高台部と体部中央付近に緑色の横線が入る。18世紀後半頃の資料であろう。

２は、青磁埦の口縁部付近の破片で、外面体部には間隔の狭い剣型の蓮弁文が施されている。15世紀後半から16世紀初頭にかけての資料であろう。

３は、煙管である。Ａ１GrのＳＫ０２付近から出土している。

註

(1) 『高広遺跡発掘調査報告書』　島根県教育委員会　1984年

(2) 大谷　晃二「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根県考古学会誌　第11集』島根考古学会　1994年

(3) 『藤ヶ森遺跡（Ⅰ地点・Ⅱ地点）発掘調査報告書』　出雲市教育委員会　1998年

出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
			口径	底径	器高					
10－1	表採	土師器 甕	21.2	－	－	口縁端部内傾する 外／ナデ 内／ナデ	褐色	密 1mm以下の白色砂粒を多く含む	良好	布留甕の特徴をもつ 搬入土器？
－2	A1Gr 11層	土師器 甕	18.8	－	－	外／ナデ 内／ナデ 頸部下内面ケズリ	黄褐色	粗い 1mm大の白色砂粒・石英・雲母多く含む	不良	
－3	a9Gr 5層	土師器 甕	26.0	－	－	口縁部　外／ナデ 内／横ハケ 頸部下　外／ハケ 内／ケズリ	外／赤褐色 内／褐色	密 1mm大の白色砂粒を多く含む	やや不良	内外面にススト付着
－4	A1Gr 11層	土師器 甕	22.6	－	－	外／ナデ 内／ナデ 頸部下内面ケズリ	外／褐色 内／淡褐色	普通 1mm以下の白色砂粒・石英多く含む	良好	
－5	A1Gr 4層	須恵器 高坏	－	9.0	－	外／ナデ 内／ナデ 脚端部上方に突出する	灰色	普通	良好	
－6	A1Gr 4層	須恵器 高坏	－	10.0	－	外／ナデ 内／ナデ	灰色	密	良好	
－7	西側溝	須恵器 高坏	－	8.6	－	外／ナデ 内／ナデ	オリーブ灰色	密 1mm大の黒色・白色砂粒を多く含む 雲母・石英含む	普通	三角形の透かし孔2カ所、切れ込み1カ所あり
－8	A1Gr 11層	須恵器 高坏	－	－	－	外／ナデ 内／不明 切れ込み3カ所あり	暗灰色 断／暗褐色	密 1mm以下の白色砂粒を含む	良好	凹線1条以上入る
－9	西側溝	須恵器 高台付 壺or椀	－	11.0	－	外／ナデ 内／ナデ	外／暗灰色 内／灰色	密 1mm以下の白色砂粒を含む	やや不良	
－10	A3Gr 12層	須恵器 坏or壺	－	6.9	－	外／ナデ 内／ナデ 底／回転糸切り	外／灰色 内／暗灰色	密 1mm以下の白色砂粒を多く含む	普通	底部中央薄く作る
－11	A3Gr 11層	須恵器 高台付 坏or甕	－	9.4	－	外／ナデ 内／ナデ	灰色	密 1mm以下の白色砂粒を多く含む	良好	
－12	A4Gr 12層	須恵器 壺or甕	16.5	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／暗灰色 内／灰色 断／暗褐色	密	良好	内外面に自然釉がかかる
－13	A1Gr	須恵器 壺or甕	16.0	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／灰色 内／黒褐色	密	普通	口縁に段を有す
－14	A1Gr 4層	土師器 坏	14.7	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	橙褐色	密 褐色粒子を含む	やや不良	回転水引き痕残る
－15	A1Gr	土師器 坏	－	7.6	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	橙褐色	密 褐色粒子を含む	やや不良	

挿図番号	出土地点	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
			口径	底径	器高					
10－16	A2Gr 4層	須恵器？ 坏	－	6.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡橙褐色	やや粗い 褐色粒子・石英多く含む	不良	
－17	a6Gr 5層	須恵器？ 坏	－	4.8	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	乳白色	密 石英非常に多く含む	やや不良	底部から体部にかけてスス付着
－18	a8Gr 5層	土師器 足高高台付坏	－	6.8	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 高台部外傾する	暗褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母多く含む	やや不良	
－19	表採	土師器 高台付坏	－	6.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 高台部短く外傾する	橙褐色	密 褐色粒子・石英含む	やや不良	
－20	A2Gr 4層	擂鉢	－	10.0	－	外／ナデ 内／擂目 外面高台部付近に１条の凹線が入る	赤褐色 断／黄褐色	密	良好	内面に重ね焼の跡残る 擂目が密に入る
－21	A2Gr 4層	擂鉢	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ、擂目	暗赤褐色 断／黄褐色	密	良好	片口部
－22	a2Gr 2層	唐津焼 皿	13.8	－	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	淡緑灰色	密	良好	内面・外面上半部に淡緑色の釉がかかる
－23	西側溝	唐津焼 坏or椀	－	5.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	淡緑灰色	密	良好	内面・外面上半部に淡緑灰色の釉がかかる 内面に重ね焼の跡残る
－24	A3Gr 12層	唐津焼 高台付坏	－	4.8	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	乳白色	密	良好	全面に乳白色の釉がかかる
－25	A3Gr 12層	唐津焼 坏	－	4.2	－	不明	褐色	密	不良	内外面に白色の釉がかかる
11－ 1	A1Gr 4層	陶胎染付 椀	－	5.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ	淡緑色 断／灰色	密 1㎜以下の黒色・白色砂粒含む	良好	全面に淡緑色の釉がかかる 体部と高台部に緑色の線が入る
－ 2	A3Gr 12層	青磁 椀	－	－	－	外／剣型の蓮弁文が入る	緑灰色 断／灰色	密	良好	内外面に緑灰色の釉がかかる

出土遺物観察表（その他の遺物）

挿図番号	出土地点	製品名	遺存状況	材　　質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備　　考
11－ 3	A1Gr 4層	煙管	完形	真　鍮	6.15	1.1	0.1	10.5	折れ曲がっている

Ⅳ．Ｂ区の調査

１．Ｂ区の概要

Ｂ区は以前は駐車場として利用されていた場所にあり、約１ｍ程度の盛土がしてあったため、重機によってこれを取り除き、排土した。そして、東西、南北ともに６ｍ間隔のグリッドを設定し、南側からＡ１～Ａ３Grとした。なお、Ａ３Grの北側には東西方向に水路が通っているため、やや変形したグリッドとなっている。Ｂ区の調査面積は、約90㎡である。

層　序（第13図）

Ｂ区の層序は、基本的にはほぼ同じ様相を示している。盛土の下は、上層から緑灰色土、褐色土、明褐色土、茶褐色土と堆積しており、明オリーブ灰色土に達する。なお、北側ではやや異なる堆積を示している部分があるが、これは調査区北側の用水路掘削時の影響を受けているためと考えられる。

また、遺構と遺物の検出状況から推察すると、明オリーブ灰色土上面は、遺構が築かれた後の時期に何度か削平を受けているものと考えられる。

遺　構（第13図）

遺構は、全て明オリーブ灰色土の上面で検出している。南のＡ１Grからは、落ち込み状遺構を２（ＳＸ０１・ＳＸ０２）検出しているが、この２つの遺構は上面が削平されているため、本来は１つの遺構であった可能性がある。Ａ２～Ａ３Grにかけては、古墳時代中期頃に築かれたと考えられる溝状遺構を４条（ＳＤ０１・ＳＤ０２・ＳＤ０３・ＳＤ０４）と、それを集積するように築かれた落ち込み状遺構１（ＳＸ０３）を検出しているほか、切り合い関係から、これらの溝状遺構よりも新しい時期に築かれ、南北方向に伸びる溝状遺構（ＳＤ０５）を１条検出している。

遺　物

遺物は、明オリーブ灰色土上面に堆積している全ての層に包含しており、古墳時代中期から奈良時代にかけての須恵器・土師器や中世の土師器・陶器などが出土している。特に、明オリーブ灰色土上層に広く堆積している茶褐色土は、安定した遺物包含層となっている。

遺構内から出土している遺物には細片が多く、時期的判断は難しいが、ＳＤ０２・ＳＤ０４からは古墳時代中期頃の遺物が確認されている。

2．遺構と遺物

ＳＸ０１・ＳＸ０２（第12図）

調査区の南、Ａ１Grの明オリーブ灰色土上面で検出した落ち込み状遺構で、検出高は標高3.9ｍである。

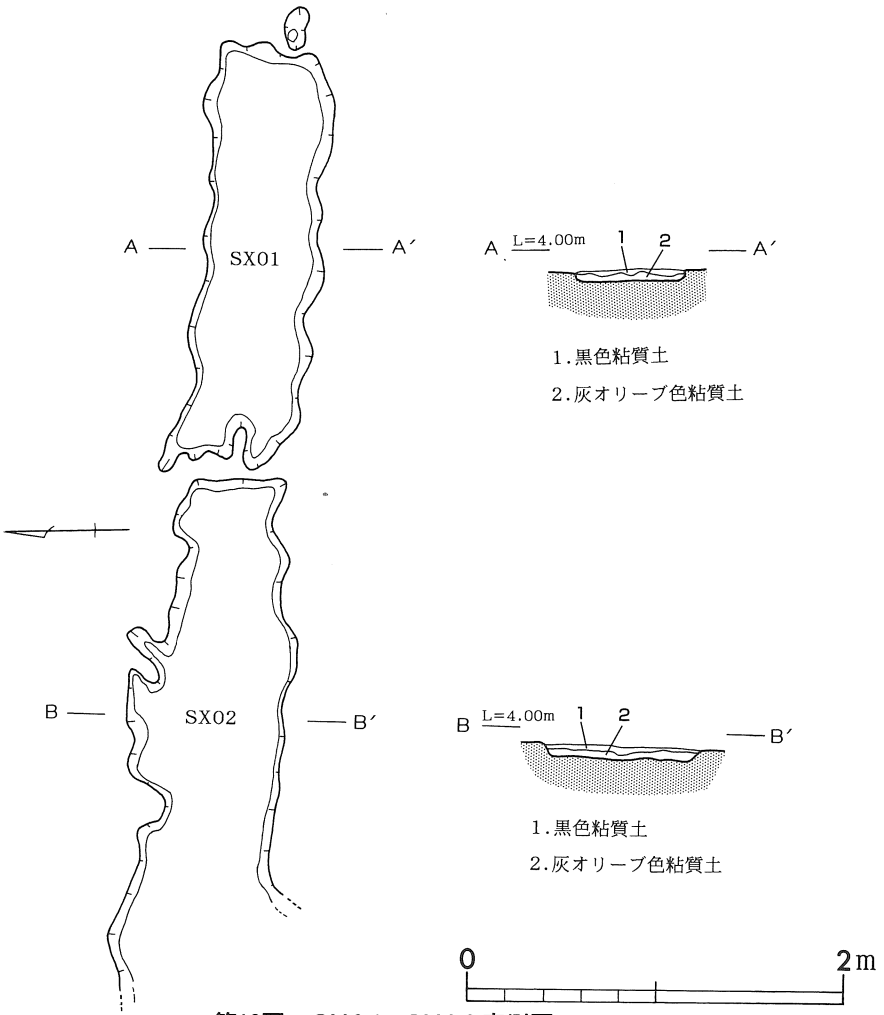
東に位置するＳＸ０１は、長さ約2.4ｍ、幅約60cmを測り、東西方向に伸びている。断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて底面は平坦に作り出し、覆土には、黒色粘質土、灰オリーブ色粘質土といった粘質土が堆積している。遺物は、土師器の細片が２点出土しているにすぎない。

西に位置するＳＸ０２は、長さ2.6ｍ以上、幅約80cmを測り、東西方向に伸びて西側は調査区外へと達している。断面の形状、覆土についてはＳＸ０１とほぼ同様で、遺物は出土していない。

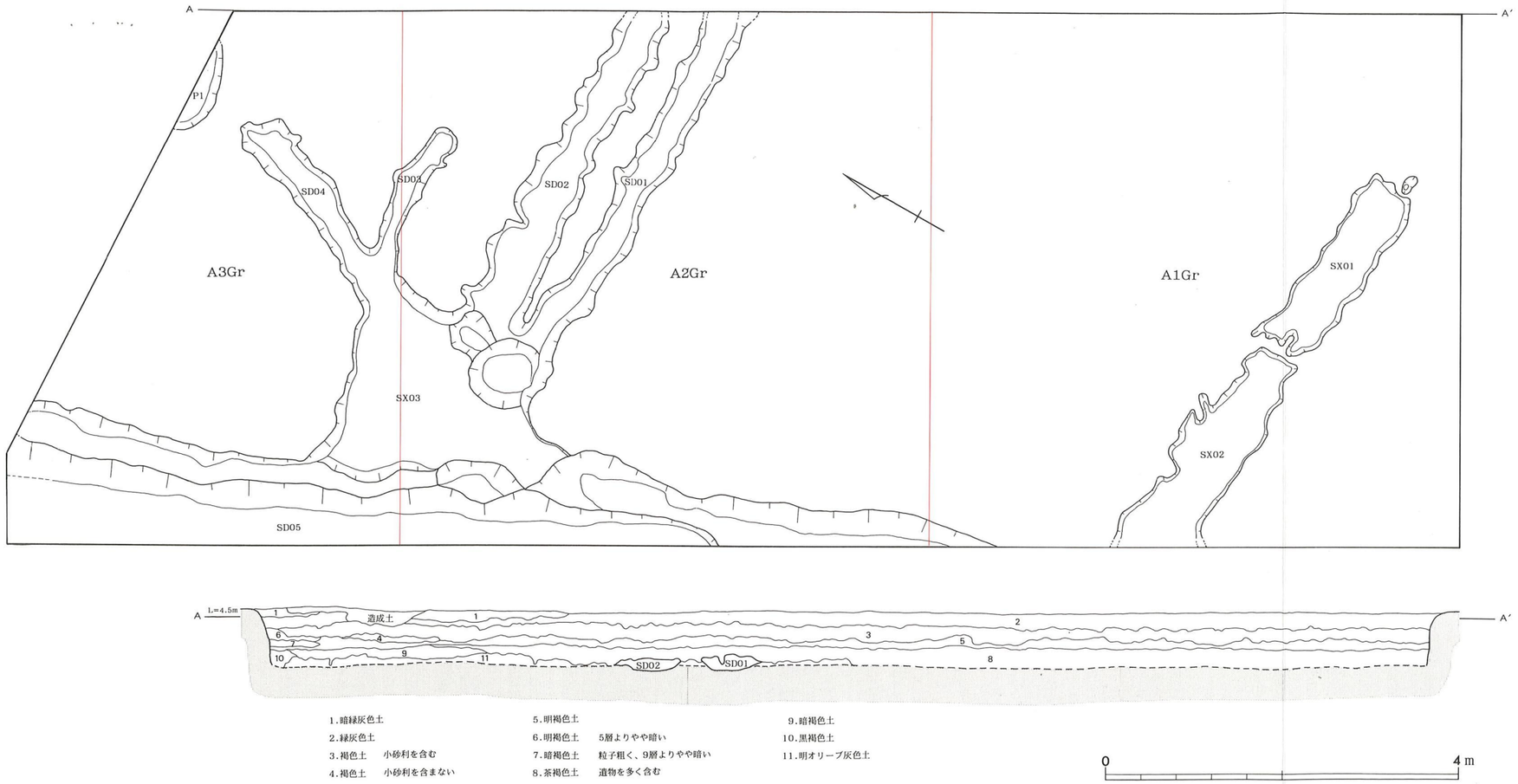
これら２つの遺構は、位置関係や断面の形状、覆土などがよく似ているうえ、遺構の上面がかなり削平されていることから、本来は同じ遺構であった可能性が強く、東西方向に伸びる溝状を呈するものと考えられる。時期・性格については出土遺物からは判断できず、不明である。

ＳＤ０５（第14図）

調査区の西側を沿ってＡ２～Ａ3 Grにかけて検出した溝状遺構で、北側と西側はそれぞれ調査区外



第12図　ＳＸ０１・ＳＸ０２実測図



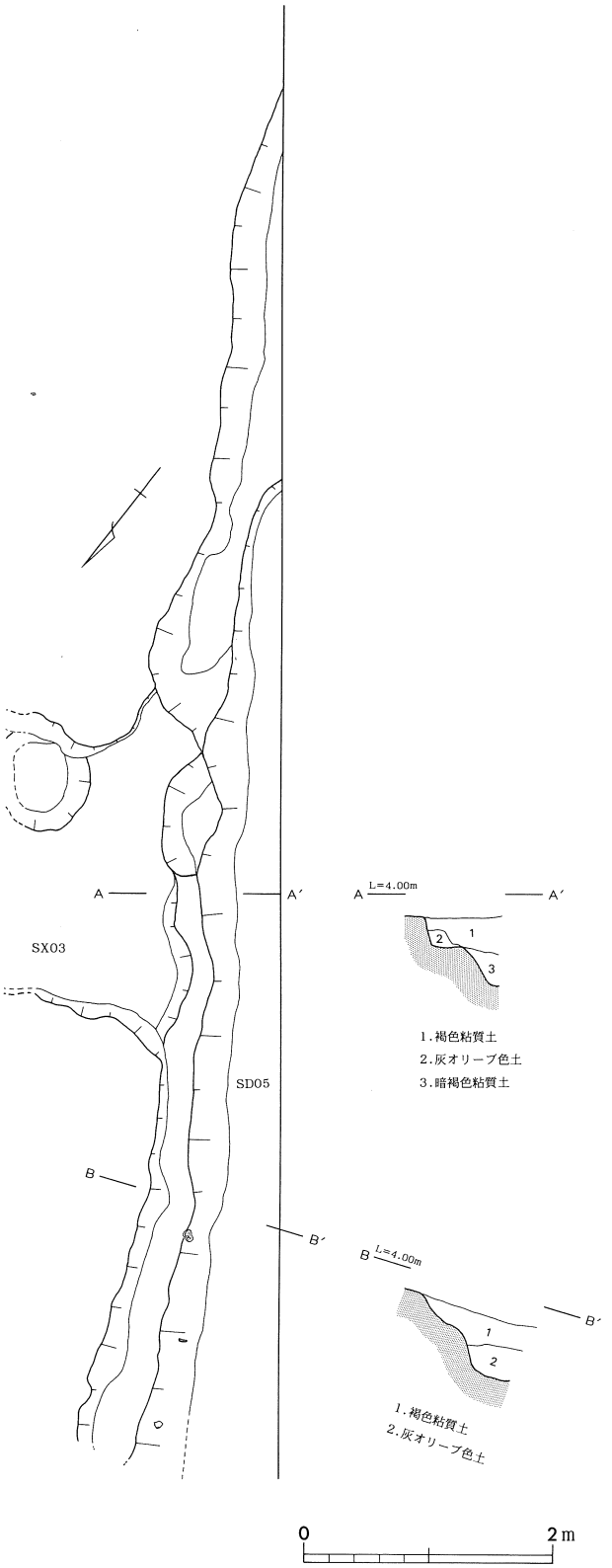
第13図　B 区 遺 構 配 置 図

へと達している。なお、明オリーブ灰色土上面で検出しており、検出高は標高3.9ｍである。検出長は11.0ｍ以上、幅は1.5ｍ以上、深さ約55㎝を測るが、平面形から推察するかぎり、幅は3.0ｍ程度になるものと予想される。

覆土には褐色粘質土や灰オリーブ色土が堆積し、最下層には非常に粘性が強く、しまりのない暗褐色粘質土が堆積している。断面の形状は、肩部からゆるやかに落ちて一度平坦な面を作り出し、そこから約45度の角度でさらに落ち、底面はかすかに丸く作り出している。

遺物は、細片の土師器・須恵器が各１点づつ出土しているにすぎず、時期的判断はし難い。しかし、遺構の切合い関係からは、ＳＤ０５の東側に位置するＳＤ０１～ＳＤ０４・ＳＸ０３よりも新しい時期に築かれたことが明らかである。

遺構の性格は、幅が3.0ｍ以上と予想され、規模が大きく、最下層には非常に粘性が強い粘質土が堆積していることから、灌漑用水路のような施設であったと考えられる。



第14図　ＳＤ０５実測図

Ｂ区のその他の遺構

その他の遺構としては、Ａ２～Ａ３Grにかけて検出している溝状遺構が４条ある。これらの遺構は上部がかなり削平されているが、覆土には一様に黒色粘質土、灰オリーブ色粘質土が堆積している。また、西側のＳＸ０３で合流していることから、同時期に築かれた遺構と考えられる。

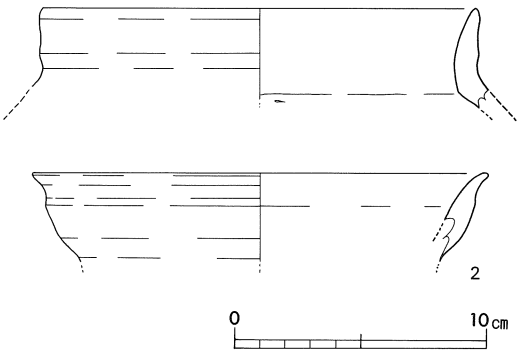
出土遺物には細片が多いが、土師器の壺、甕などが出土している（第15図）。

１はＳＤ０２から出土した土師器の壺である。頸部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部中程に稜をなして、口縁端部は直立し、丸くおさめている。

２は、ＳＤ０４から出土した土師器の甕で、１と同様に頸部から口縁部にかけてやや内湾ぎ

みに立ち上がり、口縁部中程に稜をなしている。また、口縁端部は外反して先細りになって丸くおさめ、端部の1.5cmほど下には段を有している。

以上のような壺や甕は、その特徴から古墳時代中期頃の資料と言える。そして、これらの遺物から、ＳＤ０１～ＳＤ０４・ＳＸ０３は古墳時代中期頃に築かれたと考えられる。なお、Ａ３Grで検出したＰ１も、覆土の状況などから、同時期の遺構であろう。市内では古墳時代中期の遺物はあまり確認されていないが、近年の発掘調査によって、出雲平野の南部丘陵下に位置する三田谷Ｉ遺跡[1]からは、多くの遺物や竪穴住居跡などの遺構が検出されている。



第15図　出土遺物実測図（遺構内）

遺構外の出土遺物（第16図）

Ｂ区では、遺構に伴う遺物は少量で細片が多いが、明オリーブ灰色土上層に堆積している茶褐色土を中心とした包含層中からは、古墳時代から中世にかけての遺物を検出している。

１は土師器の甕で、頸部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上がり、口縁部中程に稜をなしている。口縁端部はやや外反して先細りになり、丸くおさめている。特徴的には第15図－２とよく似ており、古墳時代中期頃の遺物であろう。なお、この甕は内外面ともに朱塗りされている。

２～５は土師器の甕、あるいは壺である。２は頸部が強く「く」の字状に屈曲し、口縁端部はやや外反し、丸くおさめている。また、内面頸部下はケズリによる調整が行われ、外面の一部には朱塗りの痕跡が残っている。３は頸部がゆるく屈曲し、内面頸部下はケズリによる調整が行われている。４は、土師器の壺であろう。全体に器壁が厚く、口縁端部は丸くおさめており、内面頸部下にはケズリと一部にハケ調整が認められる。５は口縁端部に平坦面を作り、内面頸部下はケズリによる調整が行われている。以上のような甕や壺は、２が若干古い様相を示しているが、３・４は古墳時代後期から奈良時代の範疇に入るものであろう。

６は土師器皿であり、内外面が朱塗りされている。奈良～平安期にかけての遺物であろう。

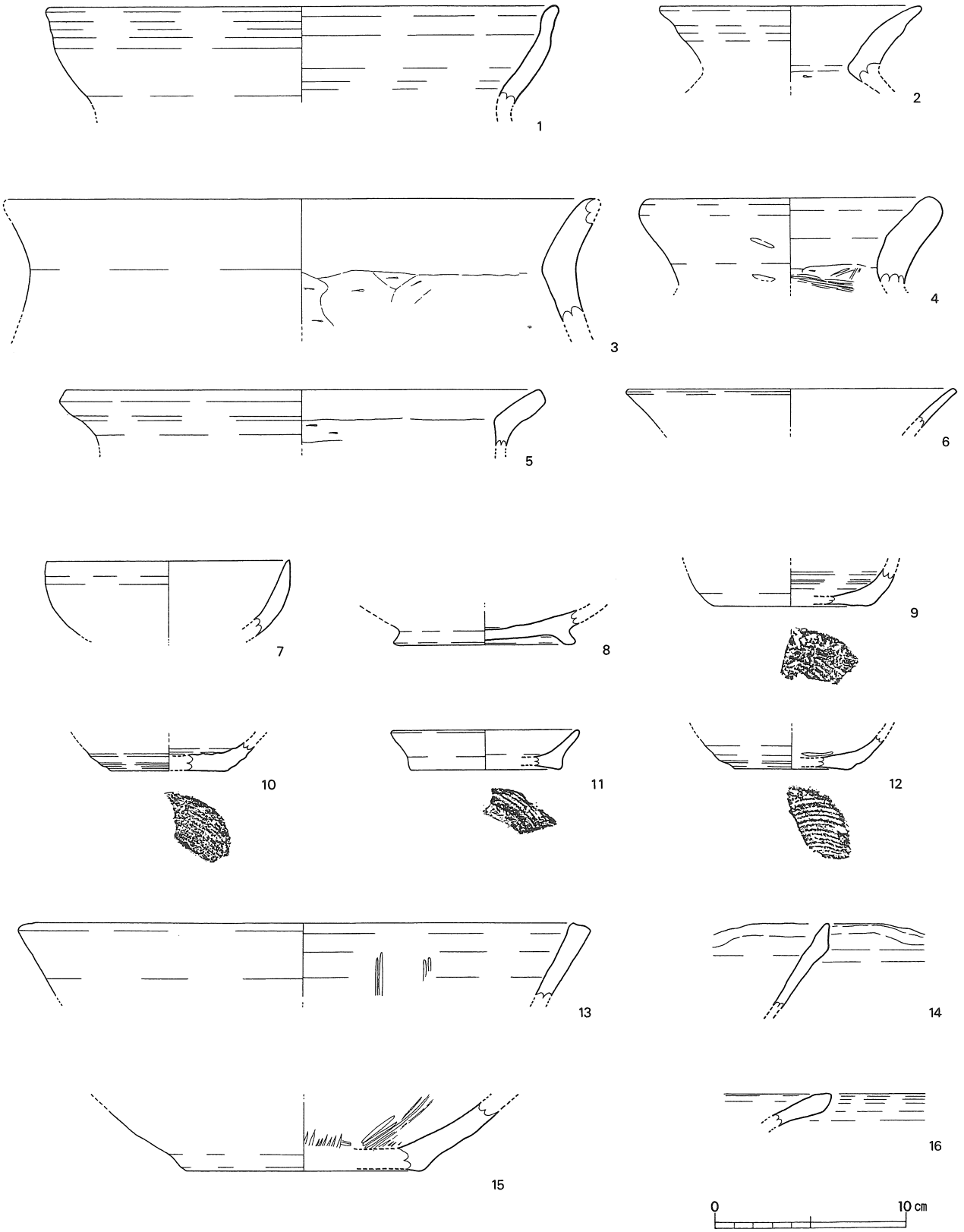
７は高坏の坏部と考えられる。内湾しながら立ち上がり、端部は直立して丸くおさめている。古墳時代後期以降の遺物であろう。なお、内外面ともに朱塗りされている。

８・９は須恵器坏である。８は、やや外傾する高台を有している。９は内湾ぎみに立ち上がり、底部は回転糸切りにより切り離されている。いずれも奈良時代以降の遺物であろう。

10・12は土師器坏で、内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。11は土師器の小皿で、口径に対して底径が大きく、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。これらの坏・小皿は、その特徴から平安期以降のものであろう。

13は陶器の擂鉢である。口縁端部は上面にフラットな面を作り、内面には部分的に擂目が入る。14は土師器の片口鉢で、内外面ともナデによる調整が行われており、内外面ともにススが付着している。15は土師器擂鉢で、内面には部分的に擂目が入る。13～15は、その特徴から鎌倉～室町期にかけての遺物であろう。

16は東播系須恵器の鉢で、外面口縁部付近が肥厚している。鎌倉期の遺物であろう。東播系須恵器は市内では報告例はないが、松江市石台(いしだい)遺跡[2]などからも出土している。



第16図　遺構外出土遺物実測図

出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
15－1	A2Gr SD02	土師器 壺	17.1	－	－	外／ナデ 内／ナデ	褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	普通	口縁部直立ぎみに立ち上がる
－2	A3Gr SD04	土師器 甕	17.8	－	－	外／ナデ 内／ナデ	褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	普通	口縁端部細くなり外反する
16－1	A2Gr 3層	土師器 甕	26.5	－	－	外／ナデ 内／ナデ	淡褐色 口縁上部／内外面とも黒褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母・金雲母含む	やや不良	口縁端部やや外反する 内外面朱塗り？
－2	A2Gr 3層	土師器 甕	13.6	－	－	外／ナデ 内／ナデ 頸部下　内／ケズリ	淡褐色	普通 1㎜以下の白色砂粒・石英・金雲母含む	普通	頸部「く」の字状に屈曲する 内外面朱塗り？
－3	A3Gr 5層	土師器 甕	30.3	－	－	外／ナデ 内／ナデ 頸部下　内／ケズリ	外／暗褐色 内／褐色	粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母多く含む	良好	頸部「く」の字状にゆるく屈曲する
－4	A3Gr 5層	土師器 壺	14.8	－	－	外／ナデ 内／ナデ 頸部下　内／ケズリ	外／暗褐色 内／褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒多く含む	普通	口縁部に厚みがある
－5	A1Gr 5層	土師器 甕	24.8	－	－	外／ナデ 内／ナデ 頸部下　内／ケズリ	暗褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英多く含む	良好	内面スス付着
－6	A2Gr 3層	土師器 坏or皿	17.0	－	－	外／ナデ 内／ナデ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	良好	内外面朱塗り
－7	A2Gr 8層	土師器 高坏	12.6	－	－	外／ナデ 内／ナデ、一部ハケ	淡褐色	やや粗い 石英多く含む	やや不良	内外面朱塗り
－8	A3Gr 3層	須恵器 高台付坏or埦	－	9.2	－	外／ナデ 内／ナデ 底／回転糸切り	外／灰色 内／暗灰色	密	良好	高台部外傾する
－9	A1Gr 2層	須恵器 坏	－	8.1	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	灰色	密 1㎜以下の白色砂粒多く含む	普通	
－10	A1Gr 8層	土師器 坏	－	6.1	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母多く含む	普通	
－11	A2Gr 3層	土師器 小皿	9.4	7.8	2.1	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／黒褐色 内／褐色 断／橙褐色	密 石英含む	良好	
－12	A3Gr 5層	土師器 坏or埦	－	6.0	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	やや不良	
－13	A1Gr 5層	擂鉢	28.2	－	－	外／ナデ 内／ナデ、部分的に擂目が入る	外／暗赤褐色 内／淡褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英含む	良好	

挿図番号	出土地点	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
			口径	底径	器高					
16－14	A1Gr 5層	土師器 鉢	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／淡黄褐色 内／暗褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	不良	内外面口縁部にススス付着 片口部分
－15	A1Gr 5層	擂鉢	－	12.2	－	外／ナデ 内／ナデ、部分的に擂目が入る	黒灰色 断／褐色	粗い 1㎜大の白色砂粒・石英含む	やや不良	底部付近に指頭圧痕残る
－16	A1Gr 5層	須恵器 鉢	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ	灰色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒を含む	普通	東播系須恵器

註

(1)　「三田谷Ⅰ遺跡発掘調査説明会資料」　島根県教育委員会　1997年

(2)　『石台遺跡』　島根県教育委員会　1986年

V. C区の調査

1. C区の概要

C区は水路を隔て、B区の北側に位置している。B区と同様に以前は駐車場として利用されており、約1m程度の盛土がしてあったことから、重機によって盛土を取り除き、排土した。そして、東西、南北ともに5m間隔のグリッドを設定し、南側からA1～A2Grとした。なお、C区の北側には南北に通じる市道があるが、この部分は事業予定地と重なる既設舗装道路であることから、調査の対象とはしていない。C区の調査面積は、東西6m×南北約10mの約60㎡である。

層　序（第17図）

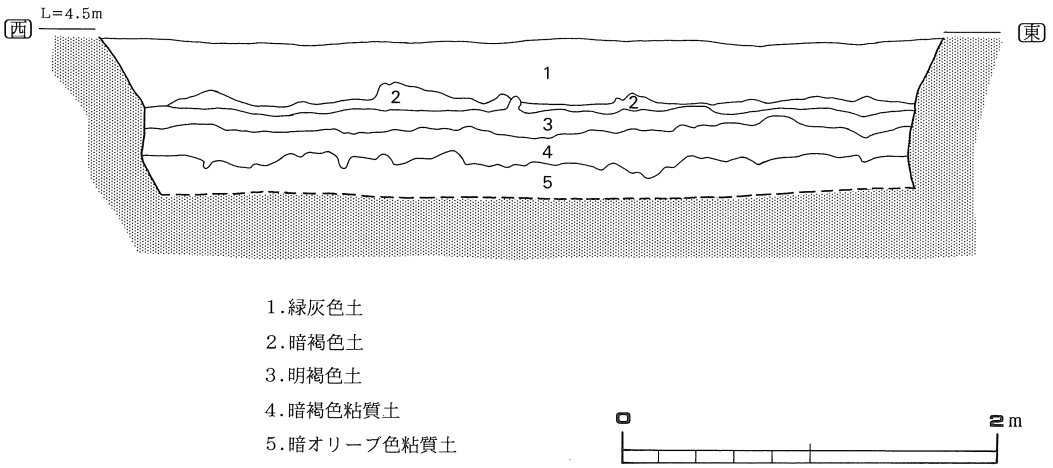
C区の層序は、基本的にほぼ同じ様相を示している。盛土の下は、上層から緑灰色土、暗褐色土、明褐色土、暗褐色粘質土と堆積し、暗オリーブ色粘質土へ達する。この層序は、色調や粘性に若干違いが認められるものの、B区の層序とほぼ対応しており、C区の明褐色土、暗褐色粘質土、暗オリーブ色粘質土はそれぞれB区の褐色土、茶褐色土、明オリーブ灰色土に対応する。また、B区に比べると下位2層からの湧水がひどく、水処理に悩まされた。なお、B区と同様に暗オリーブ色粘質土上面に堆積している層は、何度か削平を受けているものと考えられる。

遺　構

C区では遺構は検出されなかった。湧水がひどく、遺構の検出が難しい状況ではあったが、各グリッドにおける土層断面にも遺構と考えられるような落ち込みは認められない。

2. 遺　物（第18図）

遺物は、暗オリーブ色粘質土上面に堆積している暗褐色粘質土を中心に、盛土を除く全ての層から出土している。時期としては、古墳時代中期から近世にかけての遺物が認められるが、上位2層に中



第17図　C区堆積土層図

世から近世にかけての遺物、下位2層に古墳時代から奈良時代にかけての遺物を多く包含している傾向にある。

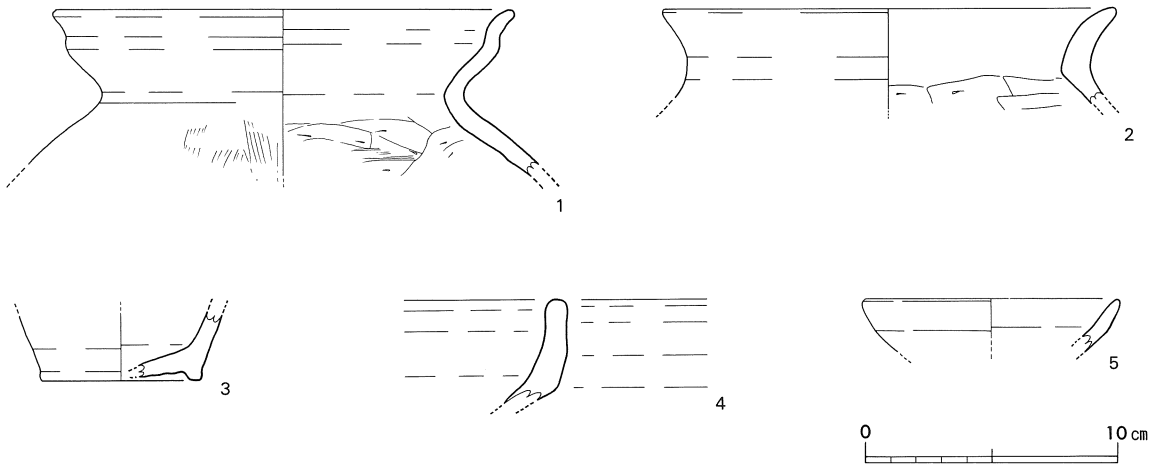
1は土師器の壺、あるいは甕である。頸部から口縁部にかけて内湾ぎみに立ち上がり、一旦稜をなして口縁端部は外反し、先細りとなる。外面頸部下は縦方向のハケ、内面頸部のやや下からケズリによる調整が行われている。形態的にB区で出土している第15図－2とよく似ており、大東式Ⅲ期[1]、古墳時代中期に相当する資料であろう。この時期の資料は、松江市夫敷(ふしき)遺跡[2]などでも出土している。

2は土師器の甕で、口縁部は内外面ともナデ、内面頸部下はケズリによる調整が行われている。古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物であろう。

3は須恵器高台付の坏、あるいは壺である。高台部は直立し、断面は四角形を呈する。体部にかけて直立ぎみに立ち上がることから、長頸壺の可能性もある。奈良時代以降のものであろう。

4は土師質のものであり、器形は不明である。内外面ともナデ調整されており、外面の屈曲する頸部下には貼付部がはずれたと考えられる痕跡が認められる。同様な資料は当遺跡のD区からも出土している。

5は美濃の天目茶碗で、内外面に暗褐色の釉がかかっている。天目茶碗は、市内でも善行寺(ぜんぎょうじ)遺跡[3]・天神遺跡[4]などから出土している。



第18図　出土遺物実測図

註

(1)　松山　智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」
『島根県考古学会誌　第8集』　島根考古学会　1991年

(2)　『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ「夫敷遺跡」』
島根県教育委員会　1992年

(3)　『出雲市埋蔵文化財調査報告書　第7集』　出雲市教育委員会　1997年

(4)　『天神遺跡第7次発掘調査報告書』　出雲市教育委員会　1997年

出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
			口径	底径	器高					
18－1	A2Gr 4層	土師器 甕	18.0	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部やや下から 外／ハケ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い	良好	口縁端部細くなり外反する
－2	A2Gr 4層	土師器 甕	17.8	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　内／ケズリ	褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英多く含む	普通	
－3	A2Gr 4層	須恵器 高台付 坏or壺	－	6.3	－	外／ナデ 内／ナデ	灰色	密 1㎜以下の白色砂粒多く含む	良好	
－4	A1Gr 3層	土師器 ？	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ	褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母含む	良好	頸部下に貼付部がはずれた痕あり
－5	A2Gr 2層	美濃 天目茶碗	10.0	－	－	外／ナデ 内／ナデ	暗褐色 断／橙褐色	密	良好	内外面に暗褐色の釉がかかる

Ⅵ. Ｄ区の調査

１．Ｄ区の概要

Ｄ区は以前は水田として利用されており、調査に入る前に試掘調査によって確認されていた遺物包含層までの水田耕作土を重機によって取り除き、排土した。そして、Ａ区と続く位置に東西、南北ともに５ｍ間隔のグリッドを設定し、東側からＡ11～Ａ13Grとし、西側にも東西２ｍ×南北５ｍの小グリッドを設定して南からａ11～ａ13Grとした。また、東側にも東西1.5ｍ×南北５ｍの小グリッドを設定し、Ｂ11～Ｂ13Grとした。なお、北側の一部では遺構の検出状況から、調査対象外となっていた箇所にも範囲を広げ、Ｂ14Grを設定している。なお、Ｄ区の調査面積は、東西約8.5ｍ×南北約15ｍの約130㎡である。

層　序（第21図）

Ｄ区の層序は、南側と北側ではやや異なる様相を示している。

南側の11～12Grにかけては、水田耕土の下は上層から灰褐色土、褐灰色土、にぶい赤褐色土、褐色土（暗褐色土）が堆積しており、オリーブ色粘質土へと達する。オリーブ色粘質土は、Ａ区の灰オリーブ色砂質土と層位的に対応し、基盤層となっている。また、にぶい赤褐色土は、Ａ区では削平されていたものと考えられる。

一方、北側13Gr付近の堆積は、水田耕土の下には小砂利を多く含む褐色土が堆積している。これは、遺構の検出状況から推察すると、近世墓地を造成する際に整地されたものと考えられる。その下面は南側とほぼ同様であるが、オリーブ色粘質土の上面の一部にはにぶい黄色砂質土が堆積している。

遺　構（第21図）

遺構は、全調査区の中でも最も多く検出され、古墳時代から近世にかけての遺構を検出している。近世の遺構としては、北側の13Gr褐色土上面で検出した墓地がある。その中には、火葬骨を土坑に直接埋葬したと考えられるもの（ＳＫ０１・ＳＫ０２）や骨壺の中に火葬骨を埋葬したもの（ＳＸ０３）、火葬骨を木棺の中に埋葬したもの（ＳＫ０３）などがある。

中世の遺構は、Ａ12Gr～Ｂ12Grにかけて土坑状の遺構１（ＳＫ０６）を検出している。この土坑は出土遺物から16世紀頃に築かれたと考えられる。

古墳時代の遺構は、南側のＡ11～Ｂ11Grにかけて溝状遺構２（ＳＤ０５・ＳＤ０６）を検出しているほか、Ａ12Grでは当該期の土器群（土器群１）を検出している。また、北側でも多くの溝、土坑、ピットを検出しているが、出土遺物は少なく、細片が多い。しかし、遺物はおおよそ古墳時代後期から奈良時代にかけてのものと考えられ、当該期の遺構である可能性が高い。なお、Ｐ１～Ｐ５、Ｐ11は掘立柱建物跡の可能性もある。

遺　物

遺物は、調査区の中でも最も多く出土しており、古墳時代後期から近世に至るまでの遺物が出土している。

近世の遺物としては、骨壺や肥前系陶器、古銭などが出土している。このうち、近世墓地から出土している骨壺は、工事中に発見されたものを含めると、計６個体分ある。

中世の遺物は、土師器のほか、中国製の青磁・白磁・青花などがあり、バラエティーに富んでいる。このうち、ＳＫ０６からは16世紀頃の青花や土師器が出土しており、西部出雲地方の中世末期の遺物を考えるうえで、貴重な資料となっている。

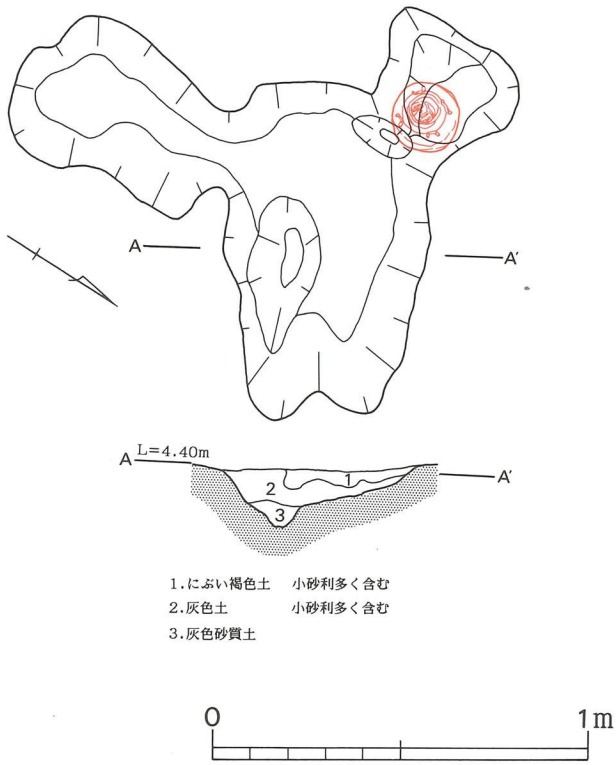
古墳時代後期から奈良・平安期にかけての遺物も多く、土師器・須恵器・白磁などが出土している。中でも土器群１からは、竈や甕、土製支脚が多量に出土しているのが注意される。

２．遺構と遺物

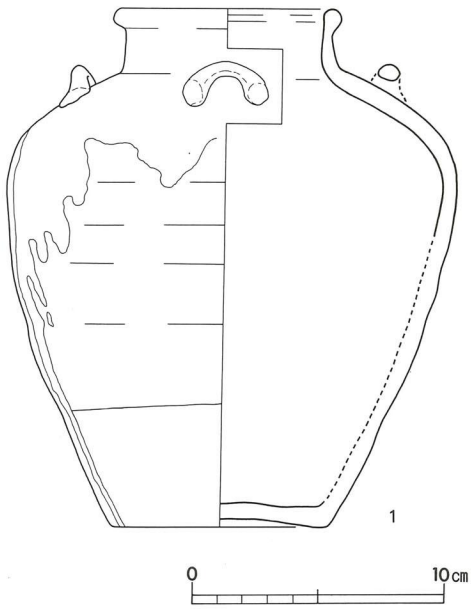
ＳＸ０３（第19図）

Ｂ13Grの褐色土上面で検出した骨壺を伴う落ち込み状の埋葬施設である。平面プランは不整形でいびつな形状をしており、西に張り出した落ち込み部に火葬骨を入れた骨壺が置かれている。検出高は標高4.4ｍである。

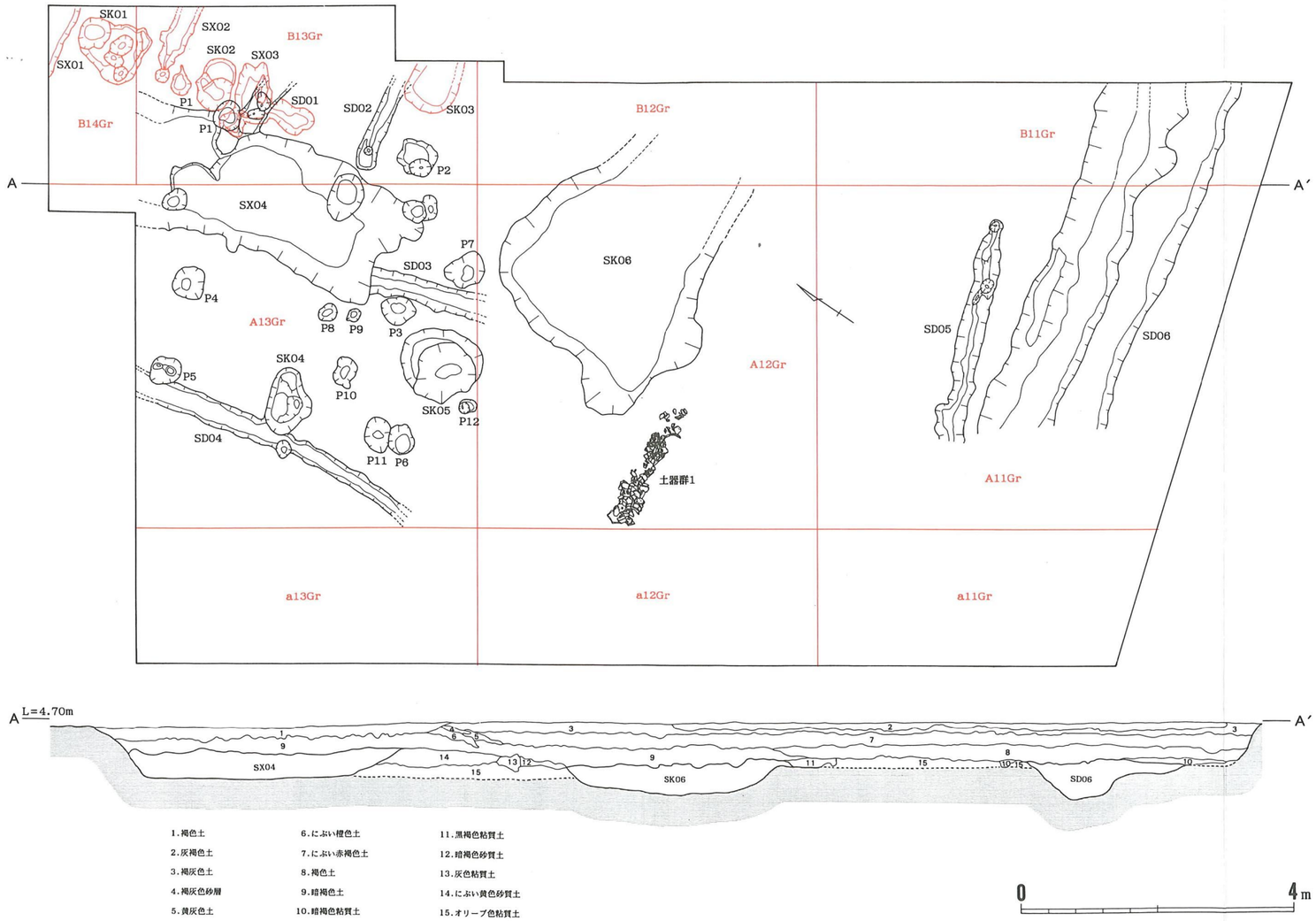
覆土には、上層に小砂利を多く含むにぶい褐色土、灰色土が堆積し、底面には灰色砂質土が堆積しているが、この堆積土中にも若干の火葬骨が認められている。なお、褐色土上面に堆積する層は、耕作によってかなりの削平を受けており、Ａ－Ａ´断面に認められるような部分的な落ち込み部には別個体の骨壺が置かれていた可能性もある。



第19図　ＳＸ０３実測図



第20図　ＳＸ０３出土遺物実測図



第21図　D 区 遺 構 配 置 図　　（赤刷は近世の遺構）

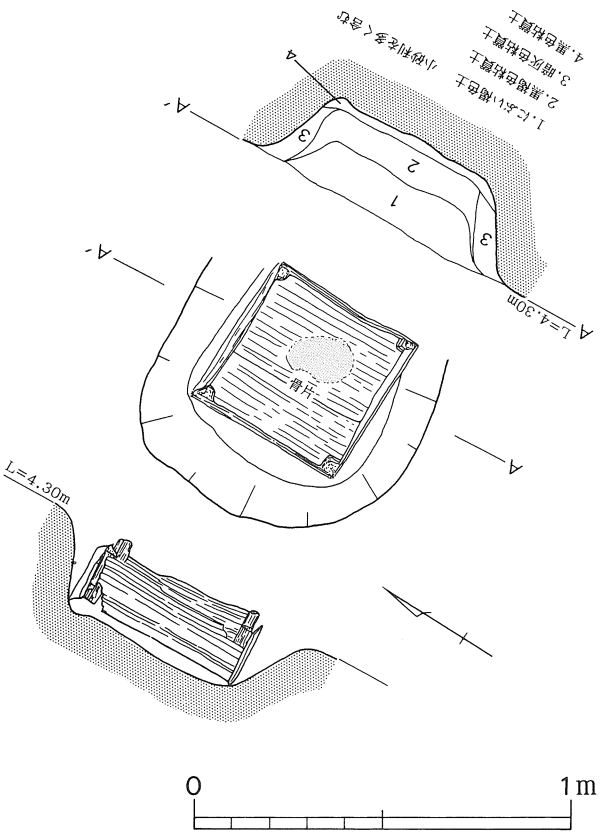
遺物は、骨壺が１個体出土している（第20図）。陶器の四耳壺で、口径 8.8㎝、底径 8.6㎝、器高20.6㎝を測り、内外面ともナデによる調整が行われ、底部は回転糸切りにより切り離された後にナデによる調整が行われている。また、外面上半部と内面口縁部には暗褐色の釉がかかり、さらにその上から黒褐色の釉が部分的にかかっている。

ＳＸ０３の時期については、骨壺の特徴や後述する文献などから、江戸後半期の墓と考えられる。

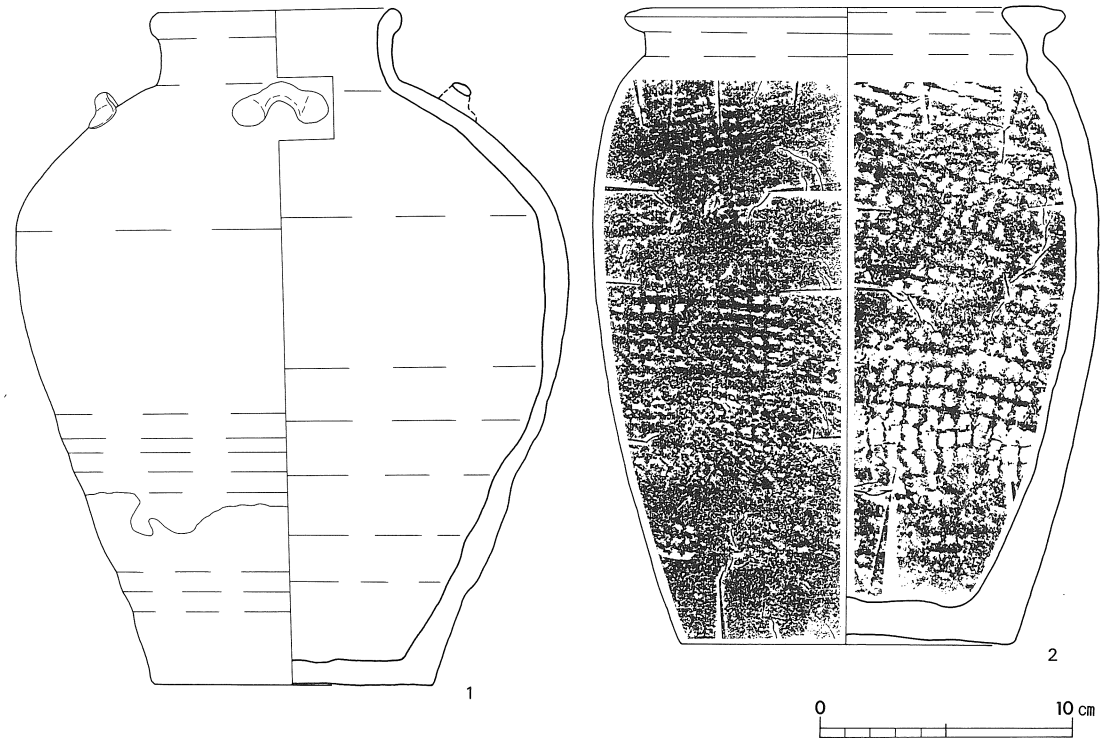
ＳＫ０３（第22図）

Ｂ13Grの褐色土上面で検出した木棺を伴う土坑墓である。東側は調査区外へと達しているが、ほぼ楕円形になるものと考えられ、南北幅約76㎝、最深部までの深さは約24㎝を測る。

断面の形状は、両肩から鋭角に落ちて底



第22図　ＳＸ０３実測図



第23図　工事中出土遺物実測図（1）

面を平坦に作り出し、中央に木棺を置いている。また、覆土の状況から、底面に黒色粘質土を敷いて木棺を置き、両肩を暗灰色土で人為的に埋めたことがわかっている。なお、木棺内に堆積しているにぶい褐色土、黒褐色粘質土については、木棺の蓋が存在しないうえ、上部が削平されているため、二次的な堆積土であると考えられる。

木棺は、底板として２枚の板材を組み合わせ、その四隅に直立する角材を立てて四面に薄い板材を組み合わせたものであり、底板の下には副木として角材を２本渡している。また、内面のほぼ中央では固まった骨片が検出されている。

遺構の時期は江戸後半期であろうが、ＳＸ０３とは異なり、木棺が置かれていることなどから、ＳＸ０３にやや先行する時期の墓と考えられる。

工事中出土の遺物（第23図・第24図）

全区間の調査終了後、道路敷設工事の際に、Ｄ区東側の調査区外としていた法面が崩れ、骨壺や古銭が出土している。

第23図－１は、四耳を有する骨壺である。内外面、底部ともナデによる調整が行われ、口径9.35㎝、底径11.0㎝、器高26.7㎝を測り、やや傾いている。また、外面上半部と内面口縁部には緑灰色の釉がかかっている。２は四耳を有さない骨壺で、内外面はタタキによって調整され、口径15.9㎝、底径13.3㎝、器高25.3㎝を測る。また、全面に暗褐色の釉がかかっている。

骨壺は工事中に計５個体出土しているが、これらはＳＸ０３から出土している骨壺と同様に江戸後半期に埋葬されたものと考えられる。

また、工事中に骨壺と同じ地点から出土した古銭は、計36枚ある。これらの中には２枚～４枚が付着していて確認できないものもあるが、全て寛永通宝である（第24図）。

寛永通宝は、古寛永11枚と新寛永12枚が出土している（13枚は不明）。

古寛永は、寛永から明暦までに鋳造されたもので、文字が太くて大きいという特徴をもつ。鋳造地については、水戸、江戸、坂本などがあるが、鋳造地までは判断し難い。

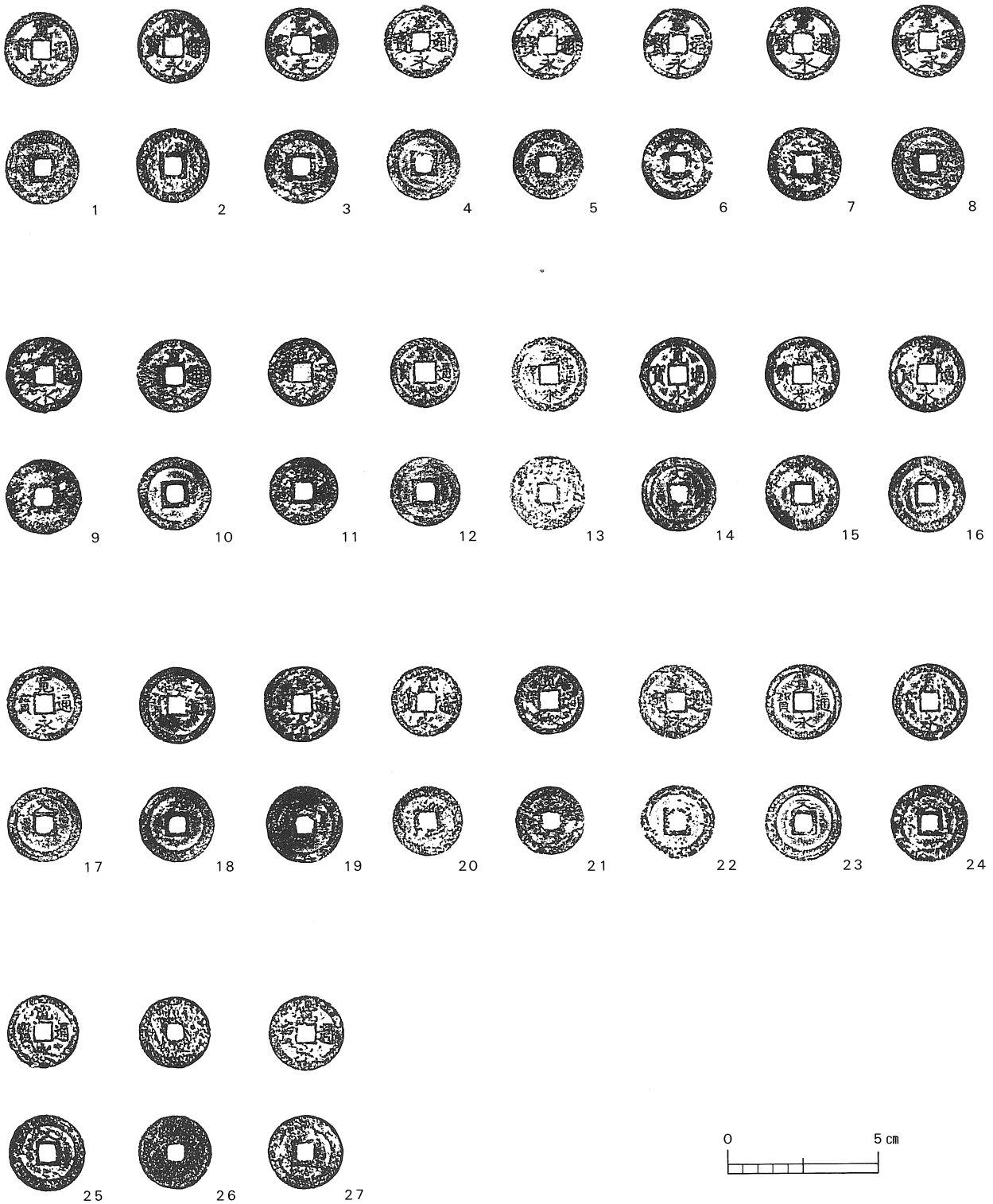
新寛永は、寛文から明治初年にかけて鋳造されたもので、文字は細く、すっきりした感じに仕上がっている。新寛永は全国各地で鋳造されるようになるが、出土した新寛永の中には裏面に「文」の文字が入るものが９枚出土している。これは、「文銭」と呼ばれ、寛文年間に江戸亀戸で鋳造されたものであろう。

文献に記載されている寺について

上述のように、Ｄ区の13Gr付近からは多くの墓坑が検出され、骨壺や木棺、古銭などが出土している。これについては、当時の文献にも記載されている。

『神門郡北方萬指出帳』(1)によれば、当時（1754年）、付近には浄土宗「長圓寺」という寺が存在していたことが記されている。このことより、1754年以前には、この寺が存在していたことが知られる。しかし、明治10年代に編纂された『神門郡皇国地誌村誌』(2)にはこの寺は記載されておらず、この頃には既に廃寺となっていたようである。

文献と墓地の検出状況から考えると、D区の13Gr付近は浄土宗長圓寺の墓域で、さらに東に墓域が広がっていたことが予想される。また、この寺の存在していた時期は比較的短期間で、18世紀から19世紀前半にかけてと考えられる。



第24図　工事中出土遺物実測図 (2)（古銭）

ＳＫ０６（第25図）

Ｄ区のほぼ中央、Ａ12GrからＢ11Grにかけてオリーブ色粘質土上面で検出した土坑状の遺構で、東側は調査区外へと達している。検出長は東西2.7ｍ以上、南北約3.2ｍ、最深部までの深さは約70㎝を測る。なお、検出高は標高3.78ｍである。

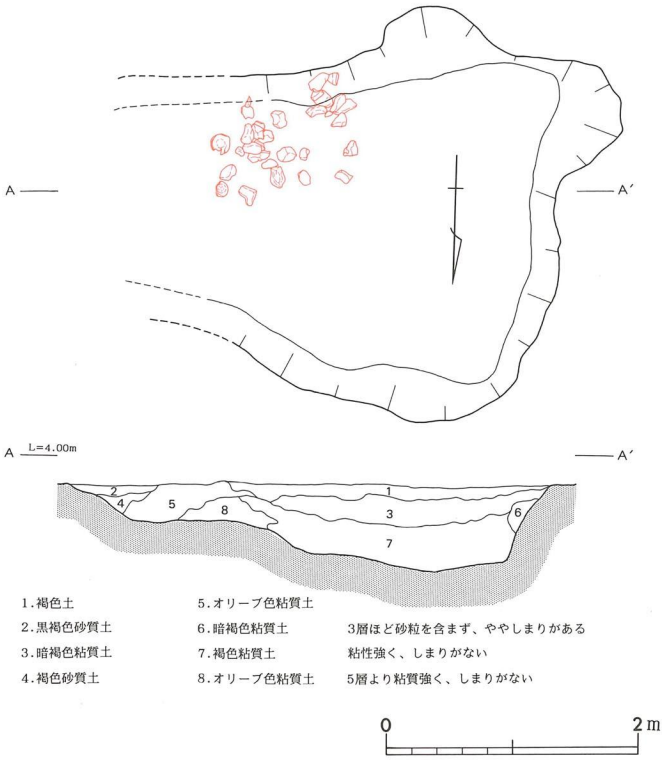
覆土には、上層に褐色土や黒褐色、褐色の砂質土が堆積しており、下層には非常に粘性の強い褐色、暗褐色の粘質土が堆積している。断面の形状は、やや西に偏った位置に最深部があり、底面にはやや丸みを有している。東側は一旦平坦に作り出し、最深部へと落ちている。なお、最下層からは、かなりの湧水がある。

遺物には、中世末の遺物が出土しており、遺構の南側に集中している。

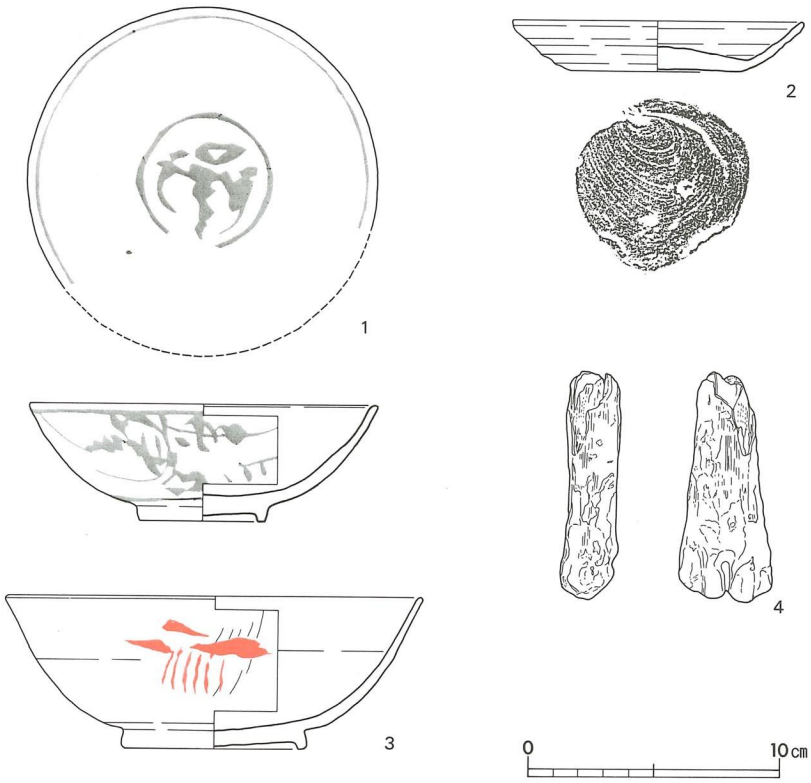
第26図－１は中国明代（16世紀後半）の青花埦である。高台を有し、外面底部を除く全面に淡緑灰色の釉がかかっている。また、内外面の口縁部やや下と底部付近には青灰色の横線が入り、外面体部と内面底部には青花が染付られている。なお、焼成は不良で、良質のものではない。

２は土師器皿である。内外面とも回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離されている。底部と体部の境が明瞭ではなく、底部に厚みがあるのが特徴である。

３は木製の漆塗椀である。高台を有し、外面には黒色、内面



第25図　ＳＫ０６実測図



第26図　ＳＫ０６出土遺物実測図

には褐色の漆が塗られ、体部外面２ヶ所の対応する位置には暗褐色の漆で文様が施されている。

４は、大型のニホンシカの左中足骨である。

以上のような出土遺物から、ＳＫ０６が築かれた時期については、おおよそ16世紀代と考えられるが、磁器については伝世するために注意が必要である。遺構の性格については、底部付近からはかなりの湧水があるうえ、木枠と考えられる木片が多く出土していることから、井戸として機能していたと考えられる。

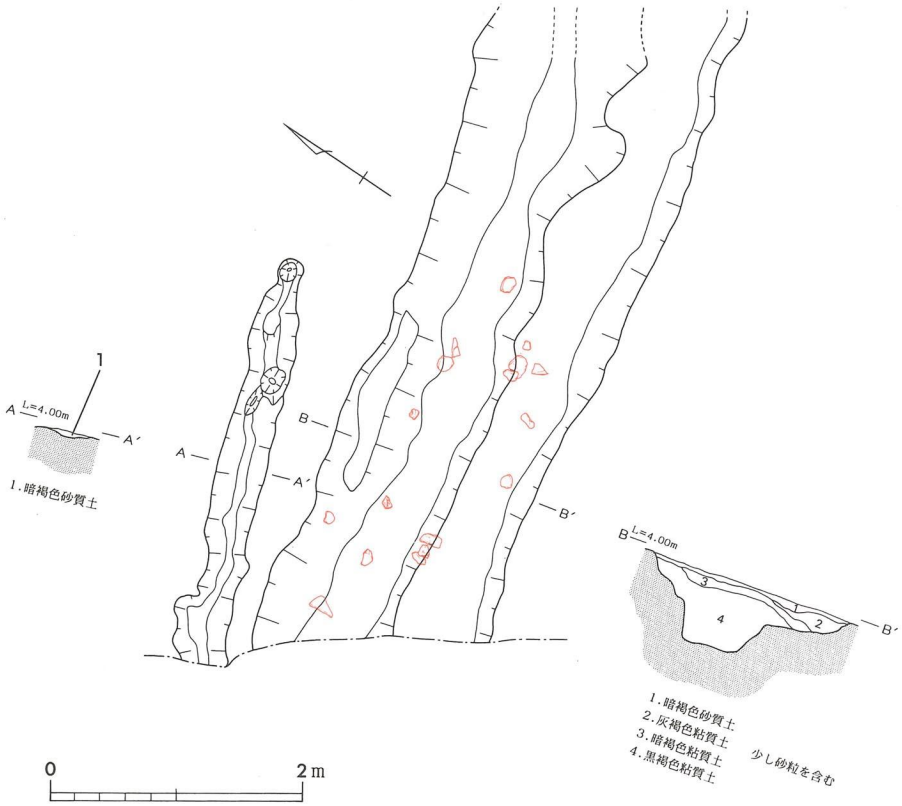
ＳＤ０５・ＳＤ０６（第27図）

調査区の南、A11GrからB11Grにかけてオリーブ色粘質土上面で検出した２条の溝状遺構で、東西方向に伸びている。なお、検出高は標高3.96ｍである。

北に位置するＳＤ０５は、西側は試掘トレンチによって切られているが、検出長3.3ｍ以上、幅約40㎝、深さ約５㎝を測る。覆土には暗褐色砂質土が堆積し、断面の形状は底面を丸く作り出してレンズ状を呈している。なお、遺物は土師器の細片が出土しているにすぎない。

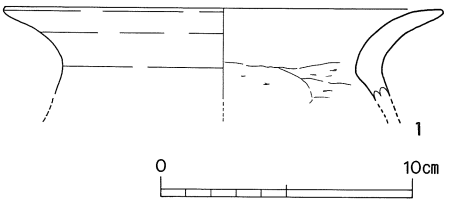
南に位置するＳＤ０６は、ＳＤ０５と同様に西側は試掘トレンチによって切られ、東側は調査区外へと達している。検出長5.5ｍ以上、幅約1.7ｍ、深さ約60㎝を測る。覆土には、上層に暗褐色砂質土や少し砂粒を含む灰褐色粘質土が堆積し、下層には粘性の強い黒褐色粘質土が堆積している。断面の形状は、両肩から約45度の角度で底面へ向かって落ちるが、南側は一旦平坦面を作り出してから底面へとさらに落ちている。遺物は、土師器の細片のみの出土である。

第28図－１は、ＳＤ０６から出土している土師器甕である。口縁部は内外面ともナデによる調整、内面頸部下にはケズリによる調整が行われている。口縁部は「く」の字状に屈曲し、口縁端部は丸くおさめている。このような甕は古墳時代後期頃の遺物と考えられ、ＳＤ０５・ＳＤ０６については当該期に築かれた可能性が強い。また、遺構の性格については判断し難いが、ＳＤ０６の下層には粘質土が堆積し、常に水の流れがあったことが窺われ



第27図　ＳＤ０５・ＳＤ０６実測図

ることから、水路として機能していたと考えられる。



第28図　ＳＤ０６出土遺物実測図

土器群１（第29図）

Ａ12Grで重なり合うような状況で出土した土器群である。

土器群は、幅約50cm×長さ1.0ｍ、層厚約10cmの範囲に集中しており、東西方向に広がっている。検出高は標高4.15ｍで、層位的にはオリーブ色粘質土の上面、暗褐色土中で検出している。

土器群から出土している遺物には竈や甕、土製支脚などがあり、貴重な資料となっている。第30図－１～５は、移動式竈である。１は口径22.2cmを測る口縁部から体部にかけての破片で、口縁部は内外面ともナデにより調整されているが、外面の一部にはケズリによる調整が認められる。これは、外面に庇を貼付けた部位と考えられる。また、外面頸部下には約１mm間隔の細かいハケ、内面頸部下は強いケズリによる調整が行われている。

２・３は竈の脚部から胴部にかけての破片である。２は外面に約 2mm間隔のハケ、内面は強いケズリによる調整が行われ、脚端部はやや外方に突出させて太くなっている。３は成形は２と同様であるが、外面に残るハケの間隔は約１mmで、２の竈よりも細かい。

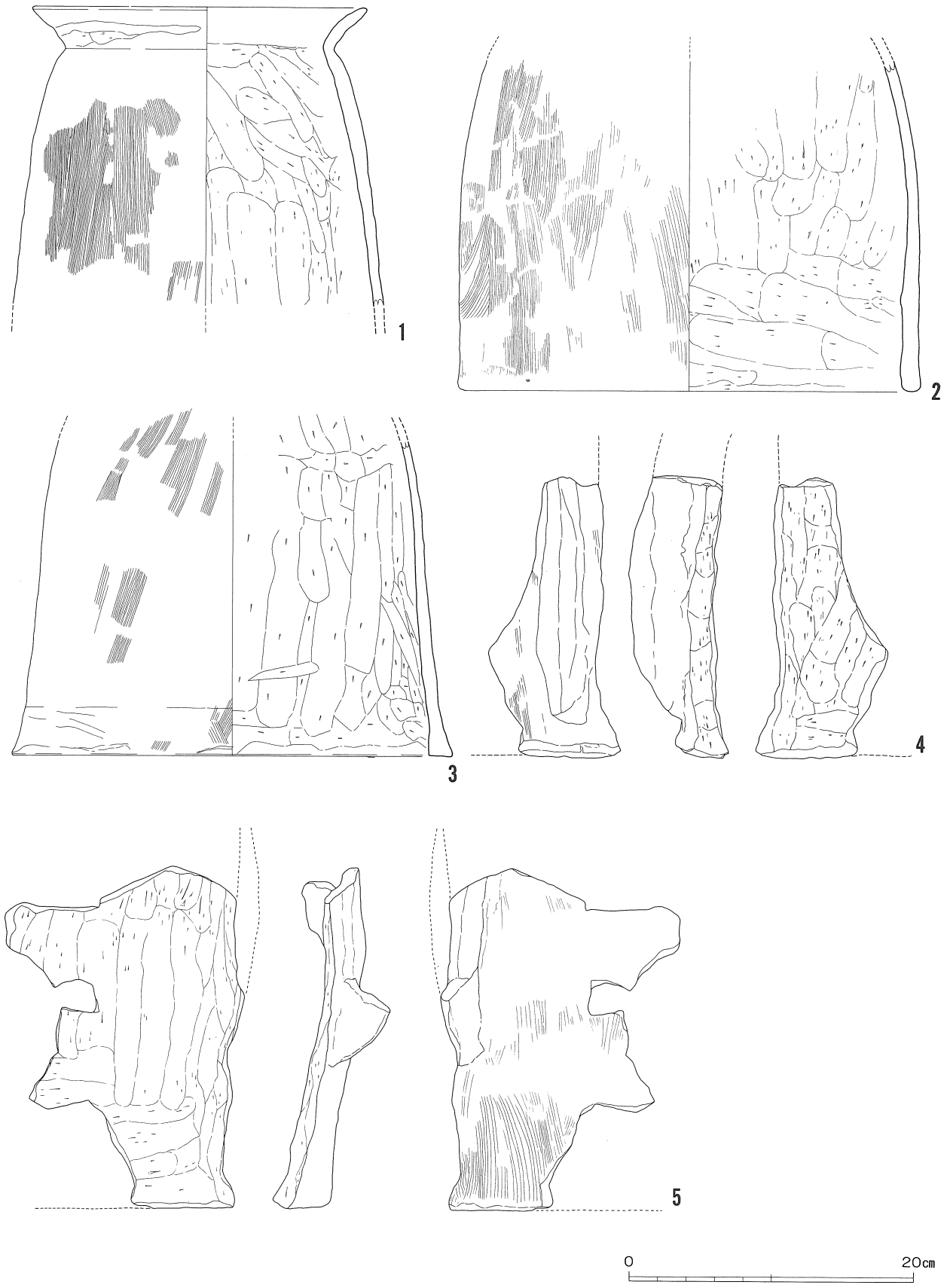
４・５は焚口部分の破片である。４は焚口の左部分にあたり、脚部から1.5cmほど上に庇を貼付けている。外面は１mm間隔の細かい縦方向のハケ、内面は強いケズリによって調整され、正面を向く平坦面もケズリによる調整が行われている。なお、庇はやや外側を向いて突出している。５は、焚口の右部分にあたり、脚部から10.5cmほど上に庇を貼付けている。外面は約２mm間隔のハケ、内面と正面を向く平坦面はケズリによる調整が行われている。庇は４のように外側を向かず、まっすぐに突出している。

第31図－１は、第30図－４と同様に焚口左部分の破片である。外面は約２mm間隔のハケ、内面と正面を向く平坦面はケズリによる調整が行われている。庇はまっすぐ突出しているが、上方は内側に湾曲しており、上部の庇と結合する部位と考えられる。

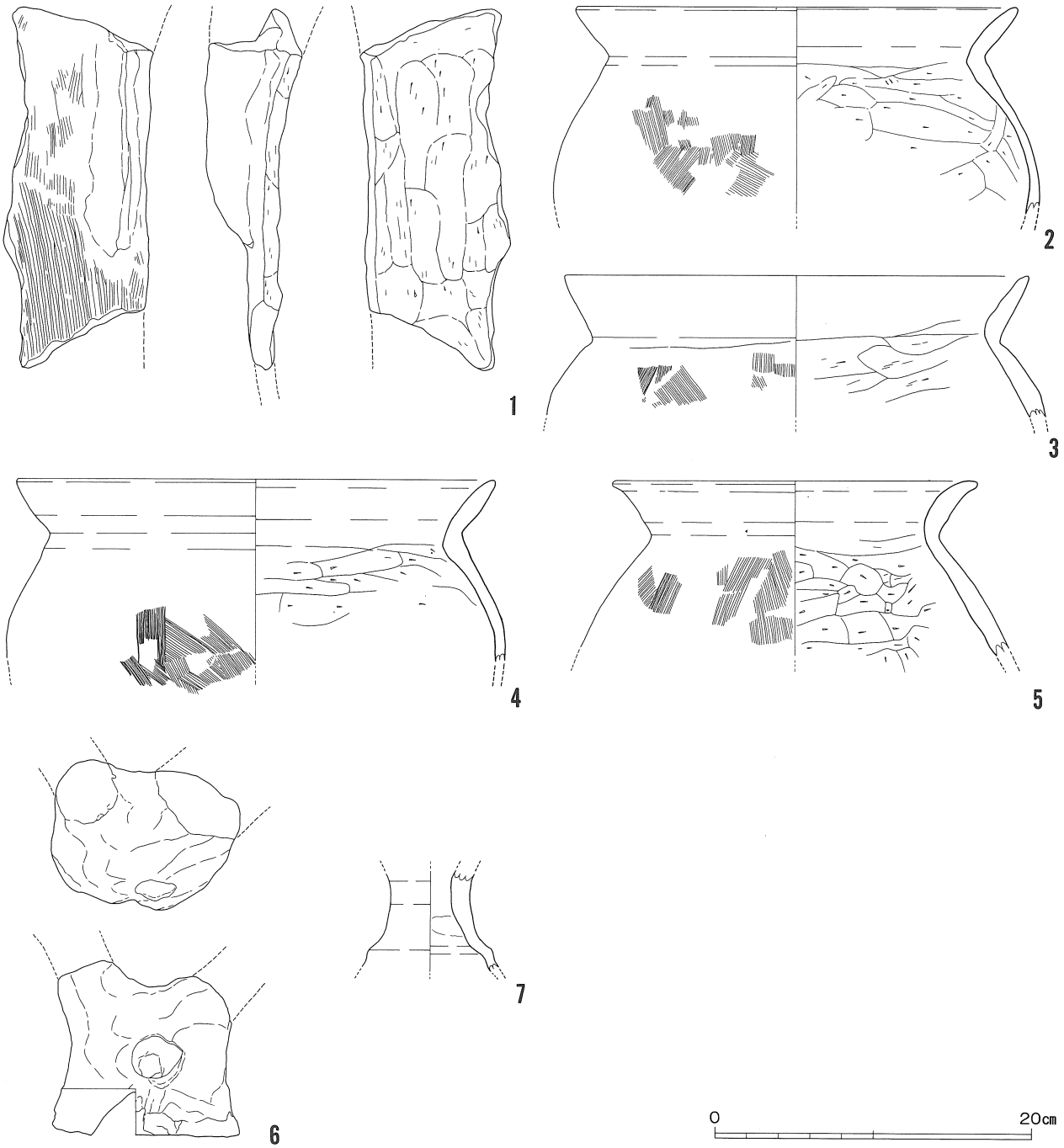
２～５は甕である。２は口縁部は内外面ナデ、外面頸部やや下からは縦、斜め方向の

第29図　土器群１実測図

細かいハケ、内面頸部下はケズリによる調整が行われている。竈と違って体部に丸みを有し、外面の



第30図　土器群１出土遺物実測図　(1)



第31図　土器群１出土遺物実測図（2）

ハケ調整が斜め方向に入ることが特徴である。３・４も成形はほぼ同じで、いずれも外面にはススが付着している。５は、２～４に比べると体部にはさほど丸みをもたず、外面のハケ調整も縦方向のみであることから、竈の口縁部の可能性がある。

６は土製支脚である。背面に円形の穴を穿ったもので、突起部は欠損しているが、このタイプの支脚には２本の突起しか有さない。底部には凹みを有して全面が強いナデにより調整され、全体に粗雑な作りである。なお、前面には焼成痕が認められる。

７は、高坏の脚部であろうか。外面はナデ、内面筒部付近にはケズリによる調整が認められる。また、筒部と脚端部には稜をなして、下方へ向いている。なお、この遺物は竈を供伴する時期の高坏とはやや異なる器形で、壺の可能性もあるのではないだろうか。

以上のように、土器群１では多くの遺物を検出しているが、移動式竈を伴出していることから、これら一連の遺物は６世紀後半から８世紀初頭にかけてのものと考えられる[(3)]。なお、移動式竈は安来

市高広(たかひろ)遺跡[4]、松江市渋山池(しぶやまいけ)遺跡[5]などから出土しているほか、市内でも三田谷Ⅰ遺跡[6]から出土しており、これらの遺跡では、甕、甑とセットで検出されている。土器群1では甑は検出されていないが、これは調査範囲が限られたものであることに要因があろう。

遺構外の出土遺物（第32図～第34図）

D区では遺構中から出土している遺物も多いが、オリーブ色粘質土上面に堆積している褐色土・暗褐色土を中心として、古墳時代後期から中世末にかけての遺物を検出している。また、13Grの上層に堆積している褐色土中には近世墓地関連の遺物を多く包含している。

第32図－1は土師器の壺である。頸部は強く屈曲し、口縁部内外面は粗雑なナデ、内面頸部下にはケズリによる調整が認められる。

2～5は土師器甕である。2は口縁端部が外反し、口縁部外面はナデ、内面は横方向の部分的なハケが認められ、内面頸部下からはケズリによる調整が行われている。3・4は、口縁部は内外面ともナデ、内面頸部下はケズリによる調整がなされるが、3は口縁端部がやや外反して先細りとなり、4は頸部がゆるく屈曲するのが特徴である。5は成形は同様であるが、内面のケズリが頸部上位にまで及んでいる。

6は土師器の鉢、あるいは甑であろうか。頸部から口縁部にかけて短く外方へ屈曲し、口縁部は内外面ともナデ、内面頸部下からはケズリによる調整が行われている。なお、この遺物は土器群1の近くから出土している。

以上のような土師器は全体の形状が把握できないが、おおよそ古墳時代後期から奈良時代にかけての資料であろう。

7・8は須恵器甕の口縁部である。7は口縁部の1㎝ほど下に突帯を有し、その下に4条の凹線が入って、その間に波状文が施されている。8は口縁部の1.5㎝ほど下に段を有し、口縁端部は丸くおさめる。いずれも古墳時代後期以降のものであろう。

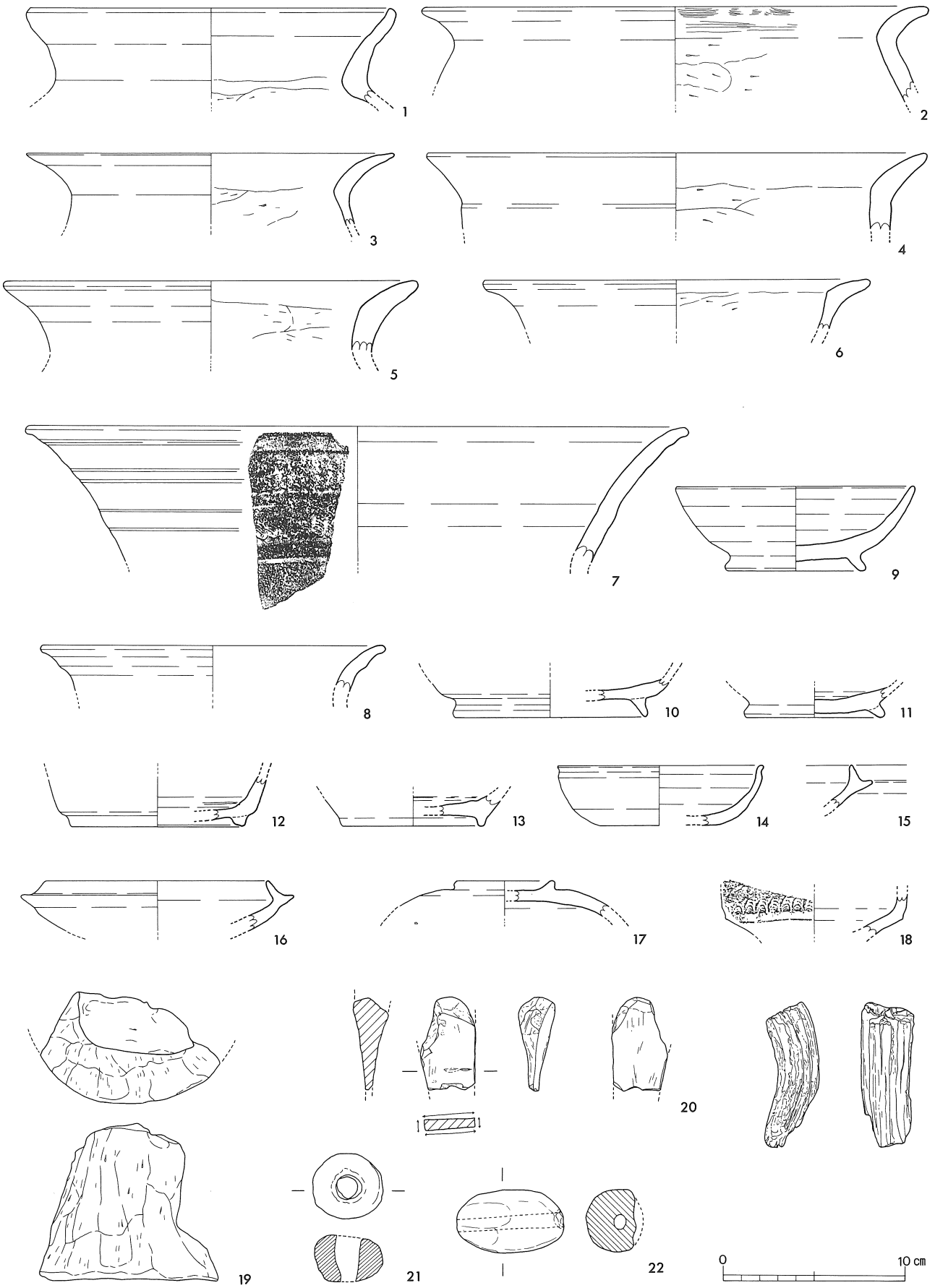
9～12は須恵器高台付椀、あるいは坏である。9はほぼ完形の高台付椀で、内外面とも回転ナデ調整され、高台部は外傾している。10・11も同様に高台部が外傾し、底部はヘラ切り後、ナデによる調整が行われているようである。12・13は、内外面とも回転ナデにより調整されているが、高台部は短く直立し、断面は四角形を呈している。これらの椀・坏は、9～11が古墳時代終末期、12・13はやや後出するものであろう。

14は無高台の坏で、口縁端部はやや下方から屈曲して外反し、底部は回転糸切りにより切り離されている。奈良時代の資料であろう。

15・16は須恵器の坏身である。口縁部の立ち上がりは短く内傾するが、15は16に比べると上方に立ち上がっており、やや古い様相を示している。これらの坏身は6世紀後半から7世紀前半にかけての資料であろう。なお、16は焼成が不良で、土師器のような淡褐色を呈している。

17は、輪状つまみを有する須恵器蓋である。内面はナデ、外面つまみの周囲はケズリによる調整が行われている。7世紀末以降の資料であろう。

18は須恵器高坏の坏部である。坏部底部付近の外面に1条の突帯を有し、その上位には波状文が施



第32図　遺構外出土遺物実測図　(1)

されている。古墳時代後期でもやや古い様相を示す資料であろう。

19は土製支脚である。全面が強いケズリによって調整され、焼成痕が認められることから、前面の破片であろう。

20は砥石である。全面に使用痕が認められ、かなりの凹みを有しており、薄い部分の厚さは約３㎜である。石材には緑色凝灰岩を用いている。

21・22は土錘である。21は円形のもので、手捏ねにより粗雑に作られている。22は最大径が3.45㎝とかなり太い管状土錘である。なお、21は土器群１の近くから出土している。

23は馬歯である。A11Grのにぶい赤褐色土中から出土している。

第33図－１～５は土師器皿、あるいは坏である。１・２は形態、特徴がよく似ており、内外面は回転ナデにより調整され、底部は回転糸切りにより切り離される。また、体部中央から口縁端部にかけて外反し、口径に対して底径が大きくなっている。このタイプの皿は13世紀以前には類例がなく、14世紀以降の遺物と考えられる。３は坏と考えられ、底部は回転糸切りにより切り離されている。４は小皿であるが、底部はナデ調整されている。５も小皿であり、内外面とも回転ナデにより調整されているが、器壁が非常に厚く、内面が黒褐色を呈しているのが特徴である。風化が著しいが、内面に漆が塗られていた可能性もある。

６は、土師器鉢であろうか。外面口縁部には玉縁状の突帯を有し、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。時期については不明であるが、形態的にはＢ区で出土している第16図－16の東播系須恵器と似ている。

７・８は台付の皿、あるいは坏であろう。このタイプのものは、松江市天満谷（てんまんだに）遺跡[7]、黒田畦（くろだうね）遺跡[8]などからも出土しており、12世紀後半以降に出現する器形である。

９・10は器形不明の土師器である。Ｃ区出土の第18図－４と同タイプのもので、内外面ともにナデ調整され、頸部下には貼付部がはずれたと考えられる痕跡が認められる。

11は、寛永通宝の古寛永と呼ばれるもので、裏面は無文である。

12～14は、ミニチュアの坏である。３点とも近世の墓域である13Grからの出土で、供献用のものであろう。底面には糸切り痕は認められず、型作りと考えられる。

15は、９・10と同様に内外面ともナデ調整されており、頸部下には貼付部がはずれた痕跡が認められ、さらに口縁部にも貼付突帯を有している。

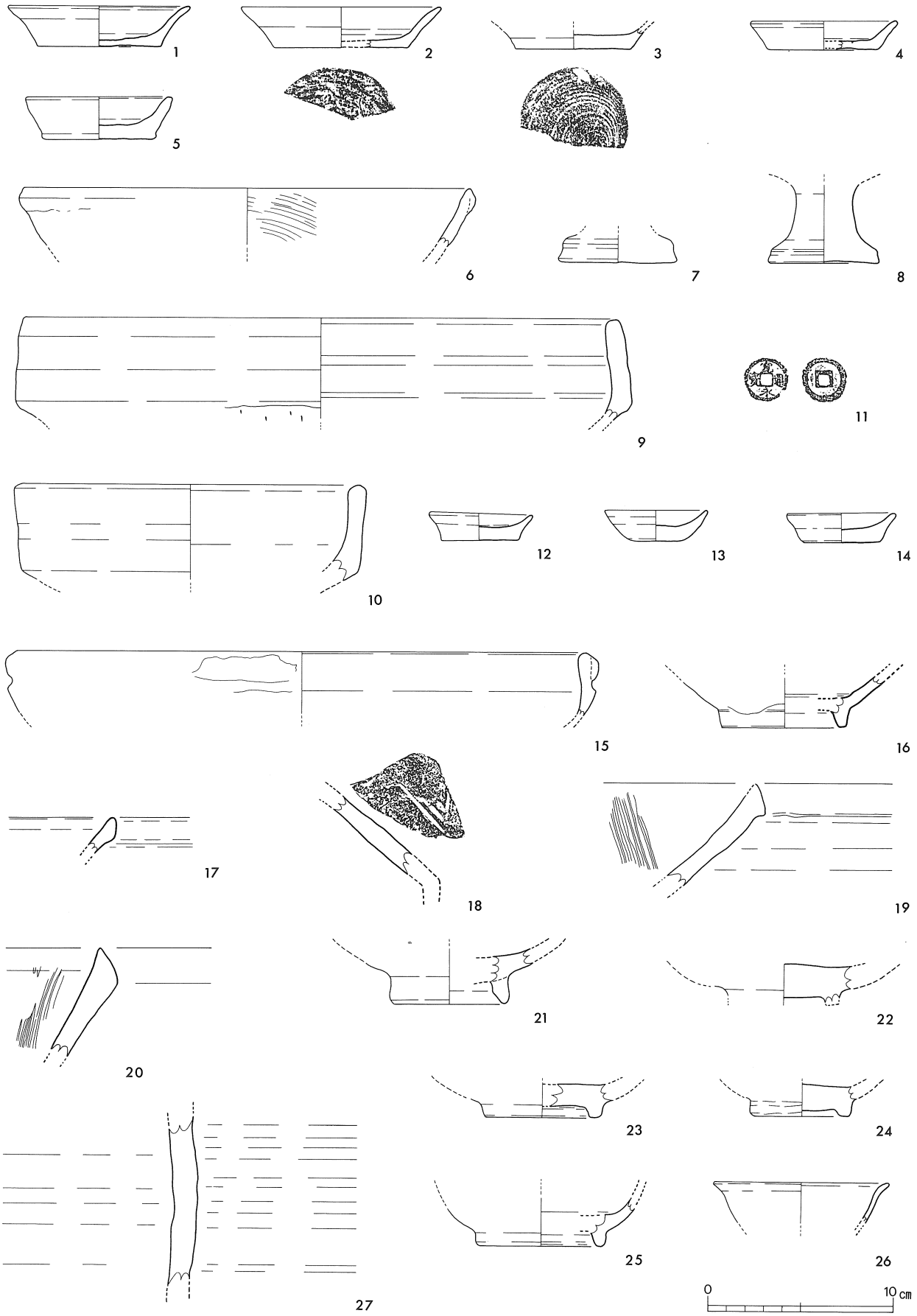
16・17は白磁である。16は高台付椀で、高台部と内面底部を除いて灰白色の釉がかかっている。17は、外面口縁部に玉縁が付くものである。その特徴から11世紀後半から12世紀代にかけての資料であろう。

18は常滑系陶器甕の肩部であろう。外面には押印が認められる。

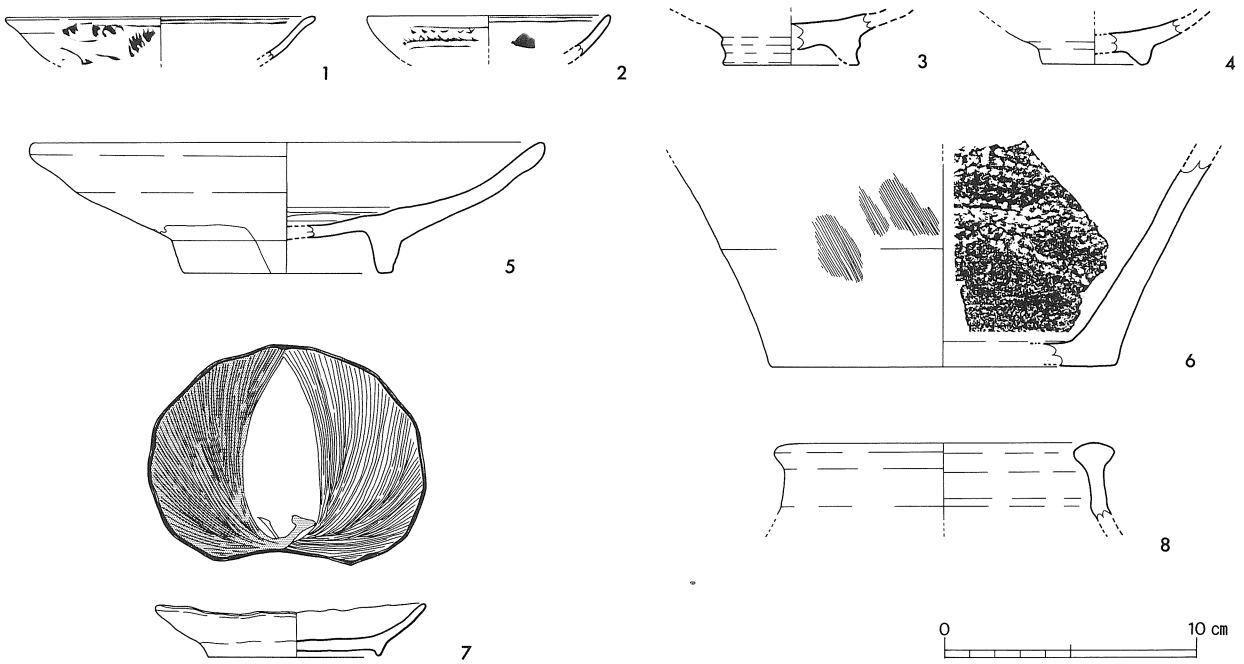
19・20は陶器の擂鉢である。底部から口縁部にかけて逆「ハ」の字状に開き、口縁端部は屈曲し、直立する。このタイプの擂鉢は室町前半期（14世紀頃）のものであろう。なお、20は備前焼である。

21～25は青磁の高台付坏、あるいは椀である。いずれも高台部を除く全面に暗緑灰色の釉がかっている。なお、破片には剣型の幅が狭い蓮弁文を施しているものもある。

26は白磁椀である。口縁端部は外反し、内外面には白色の釉がかかっている。これらの青磁・白磁は、その特徴から15世紀後半から16世紀にかけての資料であろう。



第33図　遺構外出土遺物実測図　(2)



第34図　遺構外出土遺物実測図　(3)

27は備前焼大甕の胴部であり、内外面ともナデにより調整されている。

第34図－１・２は青花である。１は皿で、口縁端部が外反する。外面体部に文様が染付けられ、内面口縁部付近には２本の横線が施されている。２も皿と考えられ、体部から口縁部にかけては内湾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くおさめている。外面体部には細かい文様、内面口縁部付近には２本の横線が染付けてある。これらの青花は、ＳＫ０６で出土した第26図－１と同時期のものと考えられ、16世紀代の資料であろう。

３・４は李朝陶器の椀、あるいは坏である。３は竹節状の高台を有し、底部を含め全面に暗緑灰色の釉がかかっている。４も高台を有し、全面に乳白色の釉がかかっている。２点とも16世紀代の資料であろう。

５は肥前系陶器の鉢である。外面上半部と内面には暗褐色の釉がかかり、内面には波状の刷毛目を施している。17世紀前半のものであろう。

６は近世の陶器鉢で、外面はナデ、内面はタタキによる調整が行われ、外面の一部にはハケによる調整が認められる。

７は磁器皿で、全面に白色釉がかかり、内面には刷毛目により、青・白の鶴を描いている。なお、この皿は骨壺と重なり合って出土しており、蓋として利用されていた可能性もある。

８は骨壺の口縁部で、上面にフラットな面を有し、暗褐色の釉がかかっている。

註

(1) 『神門郡北方萬指出帳』　1754年

(2) 『神門郡皇国地誌村誌』　1878年～1885年

(3) 広江　耕史「山陰の煮炊具」『古代の土器４　煮炊具（近畿編）』　古代の土器研究会　1986年

(4) 『高広遺跡発掘調査報告書』　島根県教育委員会　1984年

(5) 『渋山池遺跡・原ノ前遺跡』　島根県教育委員会　1997年

(6) 「三田谷Ⅰ遺跡発掘調査説明会資料」　島根県教育委員会　1997年

(7) 「天満谷遺跡」『北松江幹線・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』
島根県教育委員会　1987年

(8) 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書』　島根県教育委員会　1982年

出土遺物観察表（土器）

挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）			形態・手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
			口径	底径	器高					
20－1	B13Gr SX03	四耳壺 （骨壺）	8.8	8.6	20.6	外／ナデ 内／ナデ 底／回転糸切り後ナデ	外／黄褐色 内／灰色	－	良好	外面上半部と内面口縁部に暗褐色・茶褐色の釉がかかる
23－1	B13Gr 工事中	四耳壺 （骨壺）	9.35	11.0	26.7	外／ナデ 内／ナデ 底／ナデ	外／赤褐色 内／灰色	密 1㎜大の白色・黒色砂粒を含む	良好	外面上半部と内面口縁部に緑灰色の釉がかかる
－2	B13Gr 工事中	壺 （骨壺）	15.9	13.3	25.3	口縁部内外面ナデ 外／タタキ 内／タタキ	暗褐色 断／淡褐色	密	良好	全面に暗褐色の釉がかかる
26－1	A12Gr SK06 （上層）	青花 高台付 椀	13.7	4.9	4.65	外／ナデ 内／ナデ	淡緑灰色 断／淡灰色	密	やや不良	内外面口縁部と底部付近に線が入り、外面体部と内面底部に青花
－2	A12Gr SK06 （上層）	土師器 皿	11.5	6.8	2.0	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	淡黄褐色	密 石英多く含む	良好	底部と体部の境が明瞭ではない 底部に厚味がある
－3	A12Gr SK06 （上層）	木製品 高台付 漆塗椀	16.4	7.0	6.05	体部に丸みを有す 挽物	外／黒色 内／暗赤褐色	－	－	外面体部に文様が入る
28－1	A11Gr SD06	土師器 甕	17.3	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　内／ケズリ	褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母含む	良好	
30－1	A12Gr 土器群 1	土師器 竈	22.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	良好	外面口縁部に一部ケズリが入る 貼付痕か？
－2	A12Gr 土器群 1	土師器 竈	－	31.4	－	外／縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒含む	普通	
－3	A12Gr 土器群 1	土師器 竈	－	30.8	－	外／縦方向ハケ 内／ケズリ	淡黄灰色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	良好	
－4	A12Gr 土器群 1	土師器 竈	－	－	－	外／縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	普通	焚口左側の部分破片 庇貼付
－5	A12Gr 土器群 1	土師器 竈	－	－	－	外／縦方向ハケ 内／ケズリ	黄褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	良好	焚口右側の部分破片 庇貼付
31－1	A12Gr 土器群 1	土師器 竈	－	－	－	外／縦方向ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母含む	良好	焚口左側の部分破片 庇貼付
－2	A12Gr 土器群 1	土師器 甕	27.6	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ハケ 内／ケズリ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母多く含む	良好	
－3	A12Gr 土器群 1	土師器 甕	29.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下　外／ハケ 内／ケズリ	外／暗褐色 内／褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母多く含む	普通	外面スス付着

挿図番号	出土地点	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
			口径	底径	器高					
31－ 4	A12Gr 土器群 1	土師器 甕	30.0	－	－	口縁部　内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母含む	良好	外面体部にスス付着
－ 5	A12Gr 土器群 1	土師器 竈or甕	22.3	－	－	口縁部　内外面ナデ 頸部下　外／ナデ 内／ケズリ	外／淡褐色 内／褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母含む	やや不良	外面体部にスス付着 外面口縁部に一部横ハケ
－ 6	A12Gr 土器群 1	土製支脚	－	－	－	ナデ、一部ケズリ	淡褐色	やや粗い 1~2㎜大の白色砂粒・石英・雲母多く含む	普通	背面に円形の穴あり 突起が 2 本つく
－ 7	A12Gr 土器群 1	土師器 高坏？	－	－	－	外／ナデ 内／筒部付近ケズリ？	淡褐色	密 石英・雲母含む	普通	脚端部すぼまり稜を作る
32－ 1	a12Gr 9層	土師器 壺or甕	19.8	－	－	口縁部　内外面ナデ 頸部下　内／ケズリ	淡褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母多く含む	不良	
－ 2	a13Gr 9層	土師器 甕	27.4	－	－	口縁部　外／ナデ 内／横方向ハケ 頸部下　内／ケズリ	外／暗褐色 内／褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母多く含む	普通	外面スス付着
－ 3	A11Gr 8層	土師器 甕	20.0	－	－	口縁部　内外面ナデ 頸部下　内／ケズリ	外／暗褐色 内／褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母多く含む	良好	
－ 4	A12Gr 9層	土師器 甕	27.2	－	－	口縁部　内外面ナデ 頸部下　内／ケズリ	淡黄褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母多く含む	普通	
－ 5	A12Gr 9層	土師器 竈or甕	22.4	－	－	口縁部　内外面ナデ 頸部やや上から内面ケズリ	淡褐色	粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英・雲母多く含む	良好	
－ 6	A12～A13 SEC	土師器 鉢or甑	21.0	－	－	口縁部　内外面ナデ 頸部下　内／ケズリ	褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英多く含む	やや不良	
－ 7	A11Gr 7層	須恵器 甕	36.0	－	－	外／ナデ 内／ナデ 外面突帯 1条、凹線4条入る	淡オリーブ褐色	密	良好	凹線の間に波状文が入る
－ 8	B12～B11 SEC	須恵器 甕	18.6	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／暗灰色 内／灰色	密	良好	
－ 9	a11Gr 7層	須恵器 高台付 椀	12.9	7.3	4.6	外／ナデ 内／ナデ	灰色 外面一部暗灰色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	普通	
－10	西側溝	須恵器 高台付 椀	－	10.4	－	外／ナデ 内／ナデ 底／回転糸切り	外／暗灰色 内／灰色	密	普通	高台部外傾する
－11	A13Gr 1層	須恵器 高台付 坏or椀	－	7.5	－	外／ナデ 内／ナデ	暗灰色	密 1㎜以下の白色砂粒多く含む	良好	高台部外傾する

挿図番号	出土地点	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
			口径	底径	器高					
32－12	a13Gr 9層	須恵器 高台付 椀	－	9.4	－	外／ナデ 内／ナデ	灰色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英多く含む	普通	
－13	A12Gr 9層	須恵器 高台付 坏or椀	－	7.7	－	外／ナデ 内／ナデ	暗灰色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英含む	普通	
－14	A11Gr 7層	須恵器 坏	11.1	6.6	3.3	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	灰色	密 1㎜以下の白色砂粒多く含む	良好	口縁端部やや外反する
－15	西側溝	須恵器 坏	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／暗灰色 内／灰色	密	良好	口縁端部内傾する
－16	A12Gr 9層	須恵器 坏	12.2	－	－	外／ナデ 内／ナデ	淡褐色	やや粗い 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	不良	口縁端部内傾する
－17	a12Gr 7層	須恵器 蓋	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ	灰色	密	普通	輪状つまみを有す
－18	A12Gr 9層	須恵器 高坏	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ	灰色	密	良好	波状文が入る
－19	a12Gr 9層	土製支脚	－	－	－	外／ケズリ 内／ケズリ	淡褐色	やや粗い 1㎜大の白色砂粒・石英・雲母多く含む	普通	焼けている
33－ 1	表採	土師器 皿	9.7	6.6	2.2	外／ナデ 内／ナデ 底／ナデ	橙褐色	密 石英含む	良好	口縁端部外反する
－ 2	B13Gr 9層	土師器 皿	10.6	7.2	2.2	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	外／淡黄褐色 内／黄褐色	やや粗い	不良	口縁端部外反する
－ 3	A13Gr 1層	土師器 坏	－	6.2	－	外／回転ナデ 内／回転ナデ 底／回転糸切り	橙褐色	密 石英多く含む	良好	
－ 4	A11Gr 3層	土師器 小皿	7.7	5.8	1.55	外／ナデ 内／ナデ 底／ナデ	外／褐色 内／淡橙褐色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	普通	
－ 5	北側溝	土師器 小皿	6.6	5.8	2.3	外／ナデ 内／ナデ 底／不明	外／褐色 内／黒褐色	密 石英・金雲母多く含む	良好	厚みがある
－ 6	B11Gr	土師器 鉢？	24.0	－	－	外／ナデ 内／斜め方向ハケ	淡褐色	密 石英・雲母多く含む	やや不良	口縁端部外面に玉縁状の突帯を貼付ける
－ 7	表採	土師器 台付 坏or椀	－	6.2	－	ナデ	橙褐色	やや粗い 石英含む	普通	

挿図番号	出土地点	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
			口径	底径	器高					
33－ 8	A12Gr 9層	土師器 台付 坏or椀	－	5.8	－	ナデ	橙褐色	粗い 1㎜以下の白色砂粒多く含む	やや不良	
－ 9	A13Gr 1層	土師器 ？	31.8	－	－	外／ナデ 内／ナデ	橙褐色	密 石英・金雲母含む	良好	外面頸部下に貼付部がはずれた痕あり 外面スス付着
－10	A13Gr 1層	土師器 ？	18.0	－	－	外／ナデ 内／ナデ	橙褐色	密 石英含む	良好	外面頸部下に貼付部がはずれた痕あり 外面スス付着
－12	表採	カワラケ 小皿	5.45	4.2	1.5	外／ナデ 内／ナデ 底／ナデ	橙色	密 1㎜以下の白色砂粒・石英多く含む	良好	
－13	A13Gr 1層	カワラケ 小皿	5.5	2.4	1.65	外／ナデ 内／ナデ 底／ナデ	橙色	密	普通	
－14	A13Gr 1層	カワラケ 小皿	5.6	4.0	1.6	外／ナデ 内／ナデ 底／ナデ	橙色	密 石英多く含む	良好	
－15	A13Gr 1層	土師器 ？	30.6	－	－	口縁部に貼付突帯あり 外／ナデ 内／ナデ	淡橙褐色	密 石英多く含む	普通	外面頸部下に貼付部がはずれた痕あり 外面スス付着
－16	A13Gr 9層	白磁 高台付 坏or椀	－	6.6	－	外／ナデ 内／ナデ	淡緑灰色	密	良好	高台部・底部を除く全面に淡緑灰色の釉がかかる
－17	A13Gr 9層	白磁 ？	－	－	－	外面口縁部に玉縁 外／ナデ 内／ナデ	淡緑灰色	密	良好	内外面ともに淡緑灰色の釉がかかる
－18	a13Gr 1層	常滑系陶器 大甕	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／暗赤褐色 内／暗褐色 断／灰色	密 1㎜以下の黒色砂粒を含む	普通	片部破片 押印がある
－19	a12Gr 7層	備前焼 擂鉢	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ、擂目	外／暗赤褐色 内／橙褐色	密 1㎜大の白色砂粒・石英多く含む	普通	口縁端部直立ぎみに立ち上がる
－20	A11Gr 7層	陶器 擂鉢	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ、擂目	暗灰色 断／灰色	密 1㎜大の白色砂粒多く含む	不良	口縁端部直立ぎみに立ち上がる
－21	A13Gr 9層	青磁 高台付 坏or椀	－	6.0	－	外／ナデ 内／ナデ	淡緑色 断／灰白色	密	良好	底部以外は淡緑色の釉がかかる
－22	A11Gr 7層	青磁 高台付 坏or椀	－	6.0	－	外／ナデ 内／ナデ	淡緑色 断／淡褐色	やや粗い	やや不良	底部以外は淡緑色の釉がかかる
－23	a11Gr 7層	青磁 高台付 坏or椀	－	6.1	－	外／ナデ 内／ナデ	暗緑灰色 断／灰色	密		内面底部に円形の文様あり 底部を除いて暗緑灰色の釉がかかる

挿図番号	出土地点	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
			口径	底径	器高					
33－24	B11Gr 7層	青磁 高台付 坏or椀	－	6.6	－	外／ナデ 内／ナデ	暗緑灰色 断／灰色	密	良好	底部を除いて暗緑灰色の釉がかかる
－25	A11Gr 8層	青磁 高台付 坏or椀	－	6.6	－	外／ナデ 内／ナデ	暗緑灰色 断／灰白色	密	良好	暗緑灰色の釉がかかる
－26	A12Gr 9層	白磁 椀	9.4	－	－	外／ナデ 内／ナデ	白色 断／灰白色	密	普通	白色釉がかかる
－27	東側溝	備前焼 大甕	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ	外／暗赤褐色 内／暗灰色	密 1㎜以下の白色砂粒含む	普通	胴部破片
34－ 1	A11Gr 7層	青花 皿	12.0	－	－	外／ナデ 内／ナデ	淡青灰色 断／灰白色	密	良好	内外面に文様あり 口縁端部外反する
－ 2	A11Gr 7層	青花 皿	9.5	－	－	外／ナデ 内／ナデ	淡青灰色 断／灰白色	密	良好	内外面に文様あり
－ 3	A11Gr 7層	李朝陶器 高台付 坏or椀	－	5.2	－	外／ナデ 内／ナデ	暗緑灰色 断／灰色	密 1㎜以下の黒色砂粒を多く含む	やや不良	竹節状の高台を有す 全面に暗緑灰色の釉がかかる
－ 4	A11Gr 7層	李朝陶器 高台付 坏or椀	－	4.2	－	外／ナデ 内／ナデ	乳白色 断／灰色	密	普通	全面に乳白色の釉がかかる
－ 5	東側溝	肥前系陶器 鉢	20.0	8.0	5.15	外／ナデ 内／ナデ、刷毛目入る	外／褐灰色 内／灰色 断／灰色	密	良好	外面上半部と内面に暗褐色の釉がかかる 重ね焼の痕あり
－ 6	A13Gr 9層	陶器 鉢	－	15.6	－	外／底部付近ナデ 胴部ハケ 内／底部付近ナデ 胴部タタキ	外／暗褐色 内／赤褐色 断／暗赤褐色	密 1㎜以下の白色砂粒多く含む	普通	
－ 7	B13Gr 1層	磁器 皿	(最大径) 10.9	(最大径) 6.3	(最大高) 2.15	外／ナデ 内／ナデ	白色	－	良好	内面に鶴の刷毛目が入る 全面に白色釉がかかる
－ 8	東側溝	陶器 壺	11.6	－	－	外／ナデ 内／ナデ	暗褐色 断／灰色	密 1㎜以下の白色・黒色砂粒を含む	良好	暗褐色の釉がかかる

出土遺物観察表（その他の遺物）

挿図番号	出土地点	製品名	遺存状況	材　質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備　考
24－ 1	B13Gr 工事中	古　銭 （新寛永）	完　形	鉄	2.45	2.45	0.15	3.5	表：「寛永通寶」 裏：「文」

挿図番号	出土地点	製品名	遺存状況	材　質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備　考
24－2	B13Gr 工事中	古銭（古寛永）	完形	銅	2.4	2.4	0.15	4.0	表：「寛永通寶」 裏：無文
－3	B13Gr 工事中	古銭（新寛永）	完形	銅	2.4	2.4	0.15	4.5	表：「寛永通寶」 裏：「文」
－4	B13Gr 工事中	古銭（古寛永）	上部一部欠損	銅	2.45	2.45	0.1	4.0	表：「寛永通寶」 裏：無文
－5	B13Gr 工事中	古銭（新寛永）	完形	銅	2.35	2.35	0.15	4.0	表：「寛永通寶」 裏：「文」
－6	B13Gr 工事中	古銭（古寛永）	完形	銅	2.3	2.3	0.1	3.5	表：「寛永通寶」 裏：無文
－7	B13Gr 工事中	古銭（新寛永）	完形	銅	2.45	2.45	0.15	4.0	表：「寛永通寶」 裏：「文」
－8	B13Gr 工事中	古銭（古寛永）	完形	銅	2.4	2.4	0.15	4.5	表：「寛永通寶」 裏：無文
－9	B13Gr 工事中	古銭（古寛永）	完形	銅	2.55	2.55	0.1	4.0	表：「寛永通寶」 裏：無文
－10	B13Gr 工事中	古銭（古寛永）	完形	銅	2.5	2.5	0.2	4.0	表：「寛永通寶」 裏：無文
－11	B13Gr 工事中	古銭（新寛永）	完形	銅	2.4	2.4	0.15	3.5	表：「寛永通寶」 裏：無文
－12	B13Gr 工事中	古銭（古寛永）	完形	銅	2.3	2.3	0.15	4.5	表：「寛永通寶」 裏：無文
－13	B13Gr 工事中	古銭（1枚目新寛永）	完形	銅	2.5	2.5	0.25	7.5	2枚付着 表：1枚目「寛永通寶」 裏：2枚目「文」
－14	B13Gr 工事中	古銭（古寛永）	完形	銅	2.55	2.55	0.15	3.5	表：「寛永通寶」 裏：無文
－15	B13Gr 工事中	古銭（古寛永）	完形	銅	2.5	2.5	0.15	3.5	表：「寛永通寶」 裏：無文
－16	B13Gr 工事中	古銭（新寛永）	完形	銅	2.55	2.55	0.2	4.5	表：「寛永通寶」 裏：無文

挿図番号	出土地点	製品名	遺存状況	材　質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備　考
24－17	B13Gr 工事中	古銭（新寛永）	完形	銅	2.5	2.5	0.15	4.0	表：「寛永通寶」 裏：「文」
－18	B13Gr 工事中	古銭（新寛永）	完形	銅	2.55	2.55	0.15	4.0	表：「寛永通寶」 裏：「文」
－19	B13Gr 工事中	古銭（不明）	完形	銅	2.55	2.55	0.15	3.5	表：「寛永通寶」 裏：無文
－20	B13Gr 工事中	古銭（古寛永）	完形	銅	2.35	2.35	0.15	3.5	表：「寛永通寶」 裏：無文
－21	B13Gr 工事中	古銭（新寛永）	完形	銅	2.3	2.3	0.2	4.0	表：「寛永通寶」 裏：「文」
－22	B13Gr 工事中	古銭（古寛永）	完形	銅	2.45	2.45	0.15	4.0	表：「寛永通寶」 裏：無文
－23	B13Gr 工事中	古銭（新寛永）	完形	銅	2.55	2.55	0.2	4.0	表：「寛永通寶」 裏：「文」
－24	B13Gr 工事中	古銭	完形	銅	2.55	2.55	0.4	11.0	3枚付着 表：1枚目「寛永通寶」 裏：3枚目「文」
－25	B13Gr 工事中	古銭	完形	銅	2.65	2.65	0.4	11.0	3枚付着 表：1枚目「寛永通寶」 裏：3枚目「文」
－26	B13Gr 工事中	古銭（不明）	完形	銅	2.35	2.35	0.3	7.5	表面が2枚付着 表：不明 裏：無文
－27	B13Gr 工事中	古銭	完形	銅	2.6	2.6	0.55	16.0	4枚付着 表：1枚目「寛永通寶」 裏：4枚目無文
26－ 4	A12Gr SK06（中層）	ニホンシカ中足骨（左）	中足骨部分のみ	－	9.0	3.7	2.2	30.0	大型のニホンシカ
32－20	a11Gr 3層	砥石	両端欠損	緑色凝灰岩	5.1	3.0	1.9	21.0	全面に使用痕残る
－21	a12Gr 9層	土錘	完形	土製	3.75	3.55	－	35.5	手捏ね
－22	A11Gr 8層	土錘	一部欠損	土製	5.9	3.45	3.05	60.0	

挿図番号	出土地点	製品名	遺存状況	材　質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備　考
32－23	A11Gr 7層	馬歯	一部欠損	－	7.75	2.7	1.95	36.5	
33－11	A13Gr 1層	古銭（古寛永）	完形	鉄	2.45	2.45	0.15	3.0	表：「寛永通寶」 裏：無文

Ⅶ. E区の調査

1．E区の概要

E区は全調査区の最北部に位置し、東はC区との間を南北に通る市道に面し、北は国道9号線に面している。調査に入る前には駐車場として利用され、1.5m程度の盛土がしてあったことから、重機によって盛土を取り除き、排土した。そして東西、南北ともに5m間隔のグリッドを設定し、南側からA1～A2Grとした。E区の調査面積は、東西5m×南北約10mの約50㎡である。

層　序（第35図）

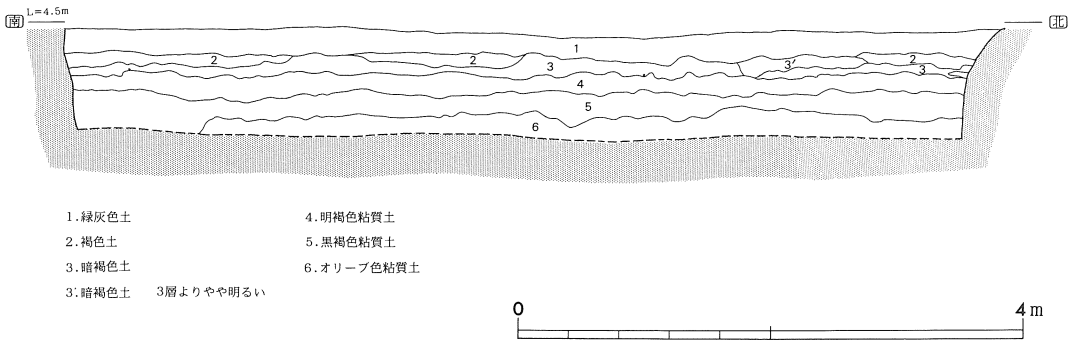
E区の層序は、基本的にほぼ同じ様相を示している。盛土の下は、上層から緑灰色土、褐色土、暗褐色土、明褐色粘質土、黒褐色粘質土と堆積し、オリーブ色粘質土へと達する。この層序は市道を隔てたC区とほぼ対応しており、E区の下位2層は、それぞれC区の明褐色土、暗褐色粘質土に対応する。また、下位2層からは湧水がひどく、水処理に悩まされた。なお、層序的にはB・C区とほぼ同じ様相を示していることから、オリーブ色粘質土上面に堆積している層は、何度かの削平を受けているものと考えられる。

遺　構

E区では、遺構は検出されなかった。特に、下位2層からは湧水がひどく、遺構の検出が難しい状況ではあったが、各グリッドにおける土層断面にも確実に遺構と考えられるような落ち込みは認められていない。

2．遺　物（第36図）

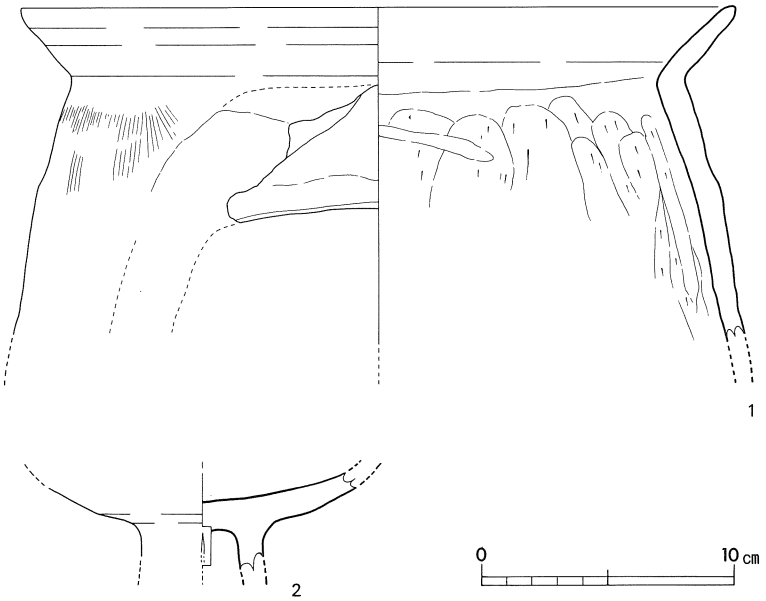
遺物は、E区の基盤層であるオリーブ色粘質土上面に堆積している黒褐色粘質土を中心に、盛土を除く全ての層から出土している。古墳時代後期から近世にかけての遺物が認められるが、時期としては古墳時代後期の遺物が中心である。なお、上位3層に中世から近世にかけての遺物、下位2層に古墳時代後期から奈良時代の遺物を多く包含する傾向にある。



第35図　E区堆積土層図

第36図－１は、移動式竈である。口径28.2cmを測る口縁部から体部にかけての破片で、口縁部は内外面ともナデにより調整されている。外面頸部下は約２mm間隔の縦方向のハケ、内面頸部下からはケズリによる調整が行われている。上部に付く庇は、やや上方に向けて大きく突出する。また、庇下部の焚口部は平坦に作っている。

移動式竈は、Ｄ区土器群１からも甕・土製支脚とともに出土しているが、Ｅ区では土製支脚は確認されていない。



第36図　出土遺物実測図

２は、須恵器高坏である。外面脚部に線状の切り込みが入るタイプのもので、内外面ともにナデ調整されている。高広編年[1] ⅡＡ期（７世紀初頭～前葉）頃の資料と考えられる。

註

(1)　『高広遺跡発掘調査報告書』　島根県教育委員会　1984年

出土遺物観察表

挿図番号	出土地点	器　種	法　量（cm）			形態・手法の特徴	色　調	胎　土	焼　成	備　考
			口径	底径	器高					
36－１	A1Gr 5層	土師器 竈	28.2	－	－	口縁部内外面ナデ 頸部下外／ハケ 内／ケズリ 庇／ナデ	外／褐色 内／暗褐色	やや粗い 1mm以下の白色砂粒・石英・雲母・金雲母多く含む	良好	上部の庇は上方を向く
－２	A1Gr 5層	須恵器 高坏	－	－	－	外／ナデ 内／ナデ	灰色	やや粗い 1mm大の白色砂粒多く含む	良好	脚部に切り込み状の透しあり

Ⅷ. ま　と　め

本書では、壱丁田遺跡から検出された遺構や遺物を通して、その性格や時期について検討してきたわけであるが、ここでは、調査区全域にわたってどの時期に遺構が築かれ、集落が営まれていたかを時期別にまとめることとする。

古墳時代前期末～中期

この地域に遺跡が形成され始めた時期にあたり、A区・B区・C区から遺物が出土している。A区からは１点のみの出土であるが、口縁端部が内傾するという特徴から布留系の甕と考えられ、当遺跡から出土した遺物の中では最も古い様相を示している。その他、器種としては土師器壺・甕がある。

遺構としては、B区のＳＤ０１～ＳＤ０４・ＳＸ０３が当該期にあたり、古墳時代中期の遺物が出土している。

遺構や遺物の出土量から考えると、B区付近を中心として当該期の集落が広がっていることが窺える。

古墳時代後期～奈良時代

全調査区から遺物を検出しているが、D区からの出土量が他区を圧倒している。中でも土器群１からは、移動式竈と甕、土製支脚がセットで出土しているのが注意される。なお、移動式竈はE区でも検出されている。その他、器種としては土師器壺・甕、須恵器坏・高坏・甕などのほか、土錘も出土している。

当該期の確実な遺構としては、B区ＳＤ０５、D区ＳＤ０５・ＳＤ０６があり、少量ではあるが土師器、須恵器が出土している。

遺構や遺物の出土量から考えると、この地域一帯に当該期の集落が営まれ、その中心はB区・D区付近にあることが窺える。

平安時代～室町時代

全調査区から遺物が検出されているが、時期的には室町期の遺物が多い。その中には中国から輸入された白磁・青磁・青花のほか、備前焼・常滑系陶器などがあり、バラエティーに富んでいる。A区・D区からの出土が多く、当該期における集落は、この地域を中心として広がっていたことが窺える。

なお、土師器坏の中には平安期・鎌倉期の遺物も含まれていると考えられ、D区からは11世紀後半から12世紀代にかけての玉縁の付く白磁が出土している。

遺構としては、16世紀頃に築かれたD区ＳＫ０６があり、この遺構は井戸として利用されていたと考えられる。出土遺物には、青花や漆塗椀・土師器皿などがあり、出雲平野の中世末期を考えるうえで貴重な資料となった。

近　世

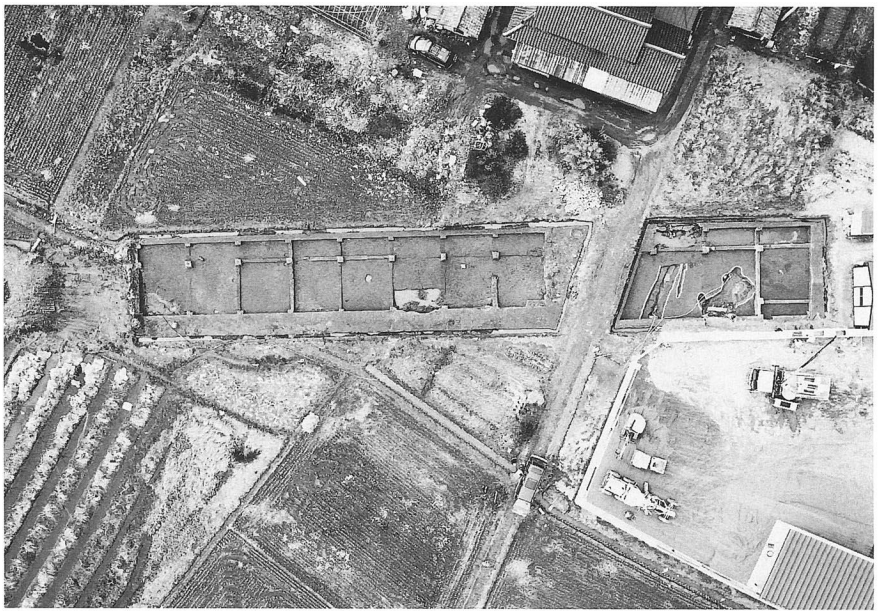
Ａ区・Ｄ区を中心として全調査区から遺物を検出している。唐津焼・肥前系陶器などが出土しているとともに、Ｄ区の近世墓地に伴って骨壺や古銭が多く出土している。

Ｄ区で検出した近世墓地は、文献から浄土宗長圓寺という寺であったことが知られ、18世紀から19世紀前半にかけて存在していたと考えられる。なお、遺構や遺物の検出状況から、墓域はさらに東方に広がっていることが予想される。

遺構としては、Ｄ区でＳＸ０３・ＳＫ０３などの墓穴を多く検出している。

図　　版

壱丁田遺跡空中写真



発掘調査区空中写真
（A区・D区）

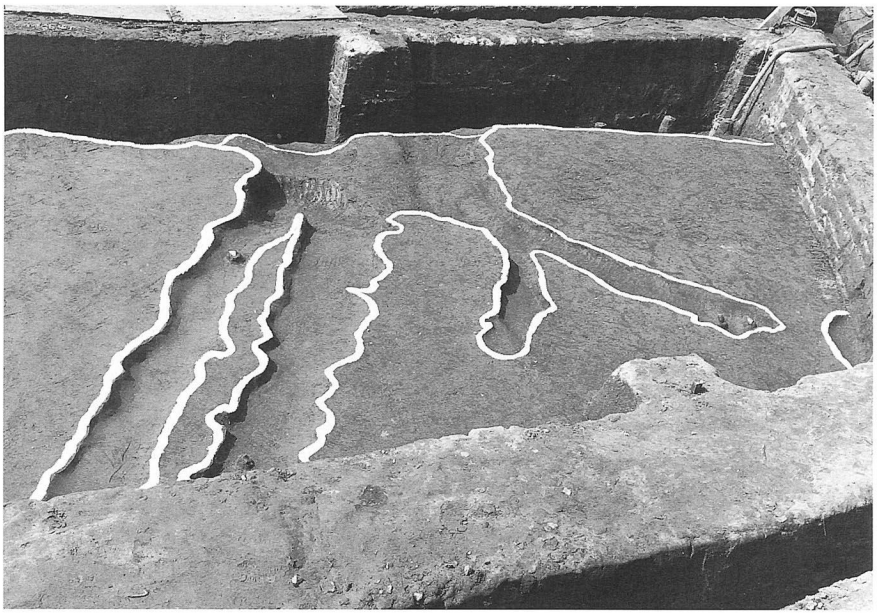
A区
SK01完掘状況

図版 2

A区
SK01・SX01・SX02完掘状況

A区
SK02完掘状況

B区
遺構検出状況(全体)

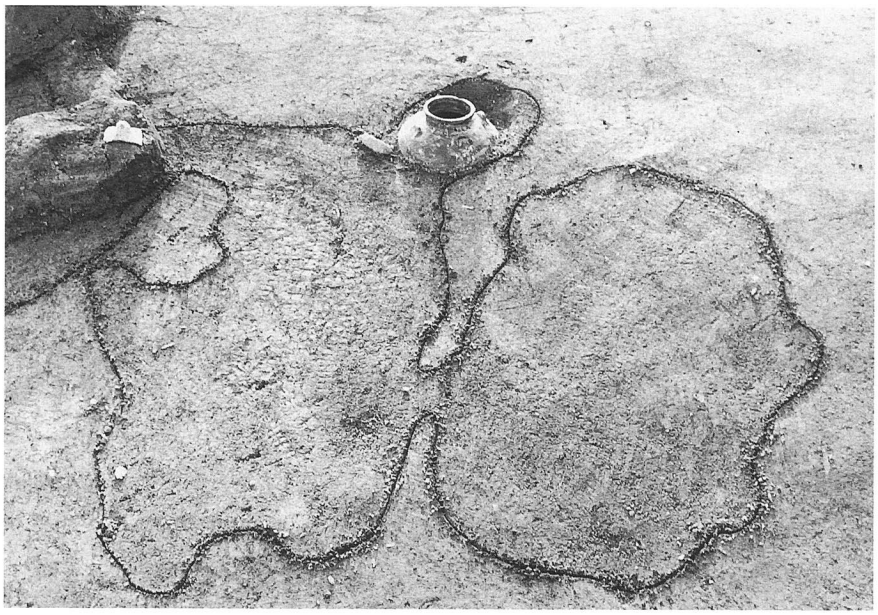


B区
遺構検出状況(北側)

B区
SD05断面

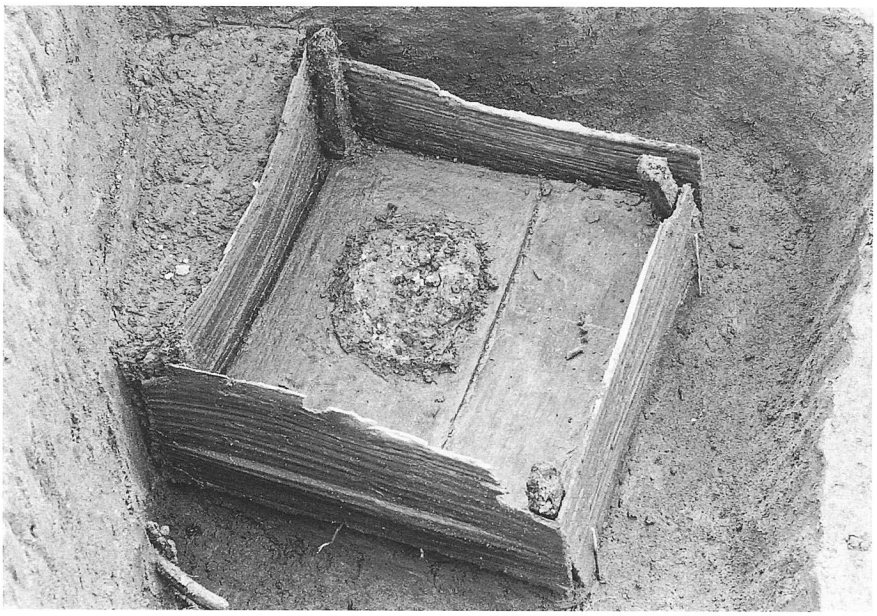
C区
堆積土層断面(南北)

図版 4

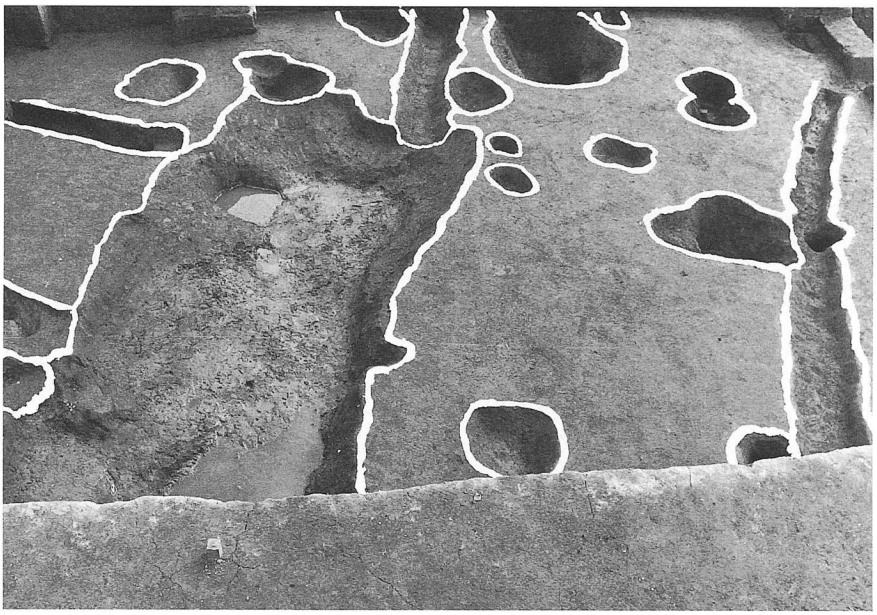


D区
SK02・SX03検出状況

D区
SX03骨壺出土状況



D区
SK03検出状況



D区
遺構検出状況(北側)

D区
SK06遺物出土状況

D区
SK06完掘状況

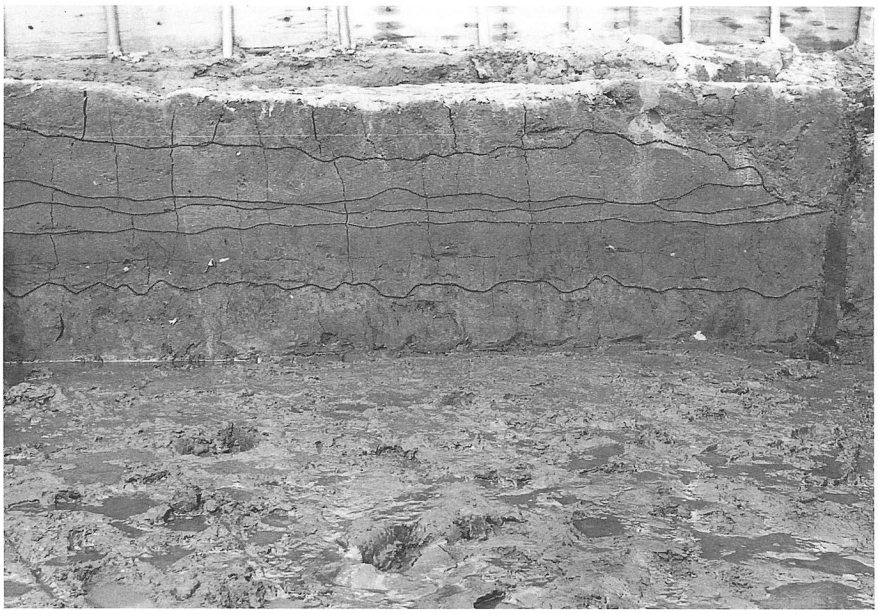
図版 6

D区
SD06遺物出土状況

D区
SD05・SD06完掘状況

D区
土器群1遺物出土状況(部分)

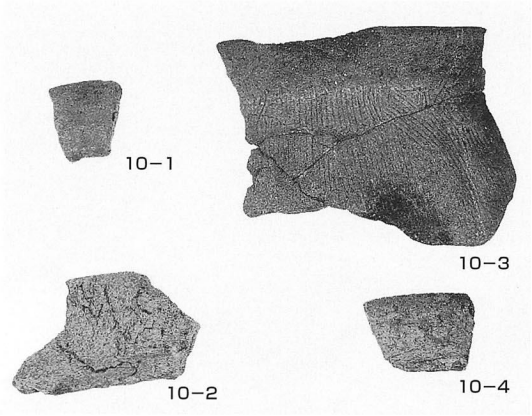
D区
土器群 1 遺物出土状況(全体)

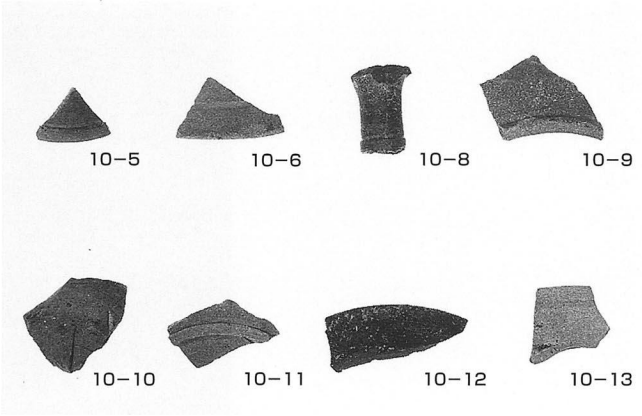


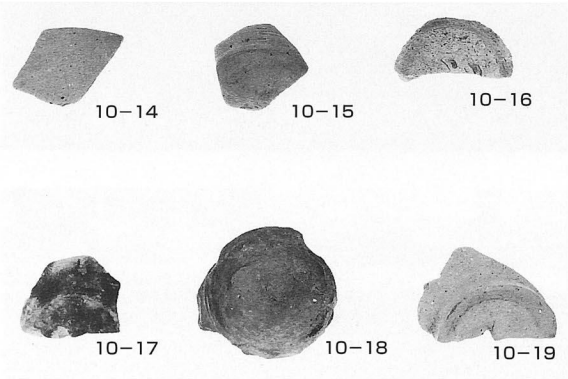
E区
堆積土層断面（東西）

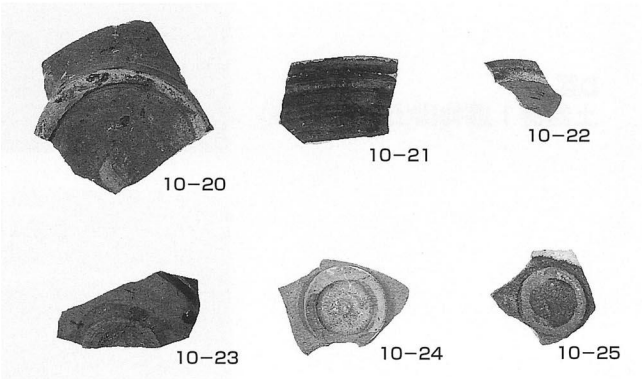
E区
竈出土状況

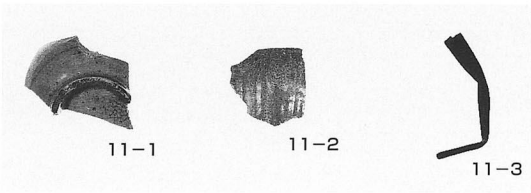
図版8



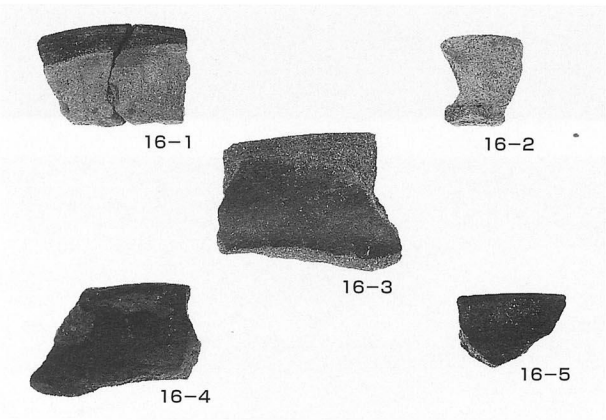


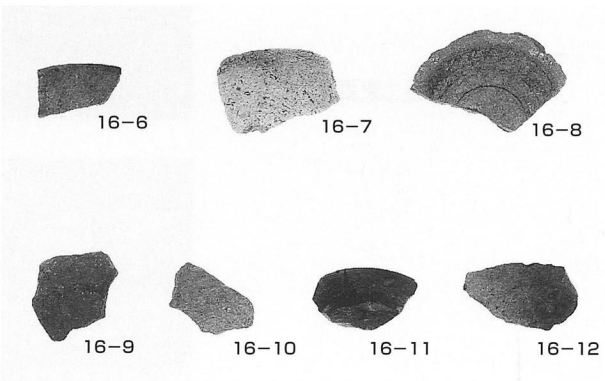




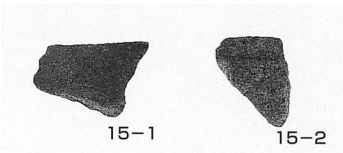


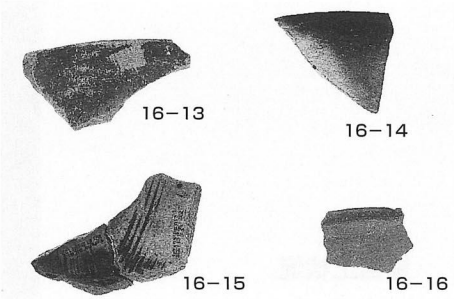
A区　出土遺物

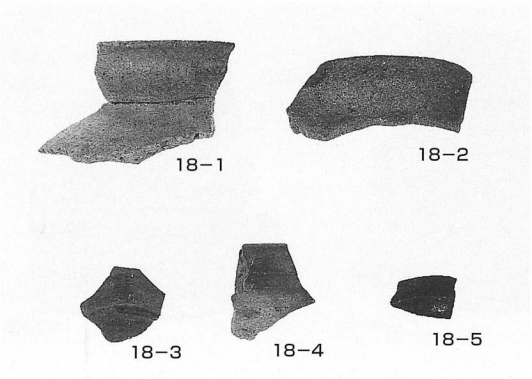




B区　出土遺物

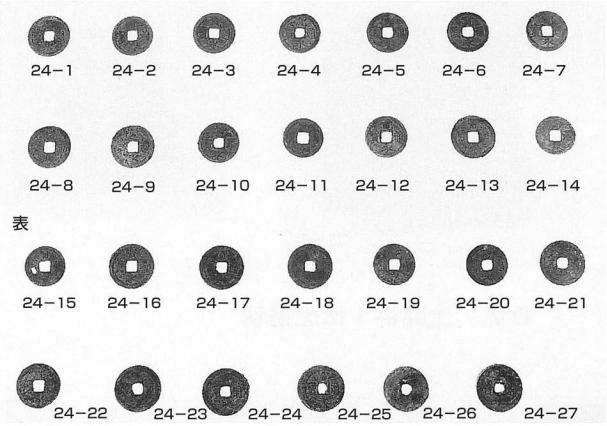


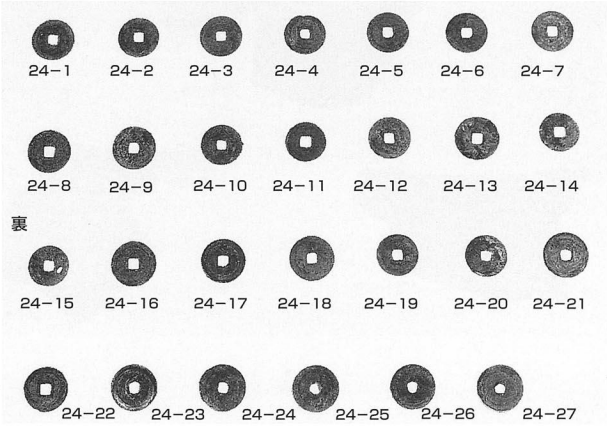




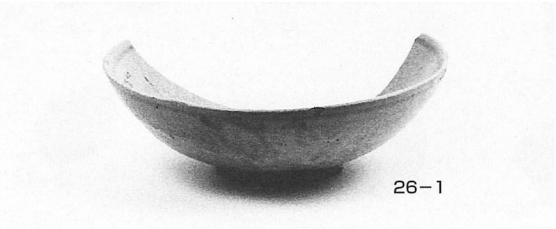
C区　出土遺物

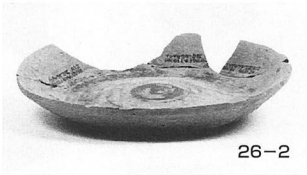
D区　SX03出土遺物

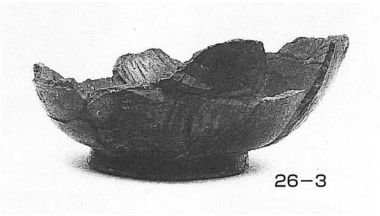


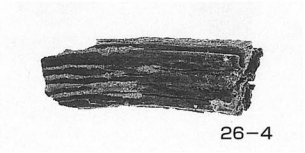


D区　工事中出土遺物

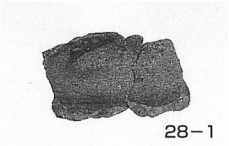






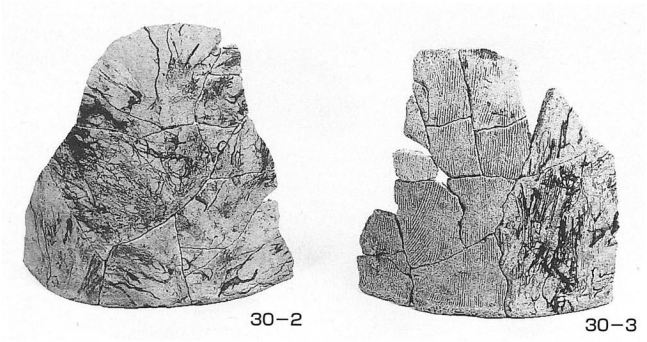


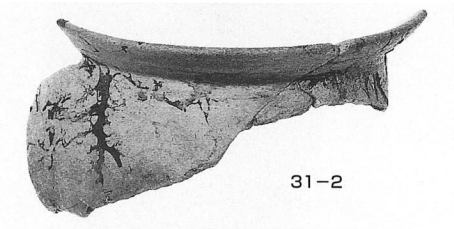
D区　SK06出土遺物

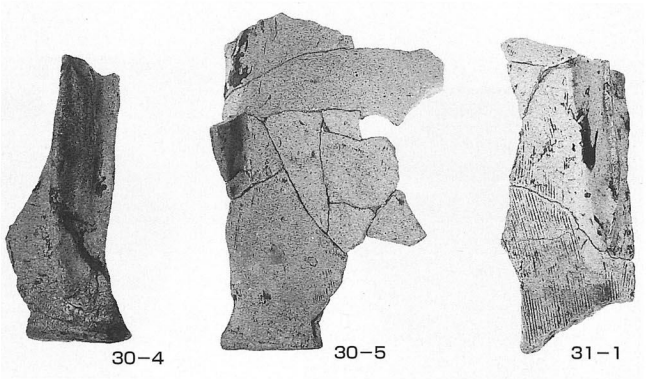


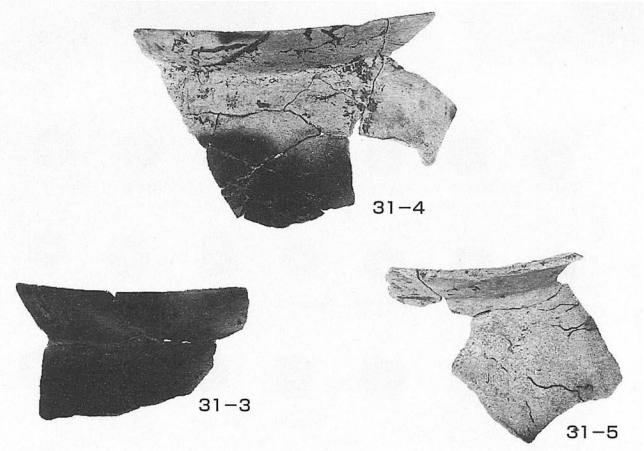
D区　SD06出土遺物

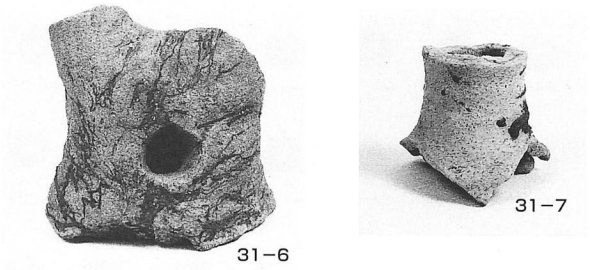
30−1


30−2 30−3

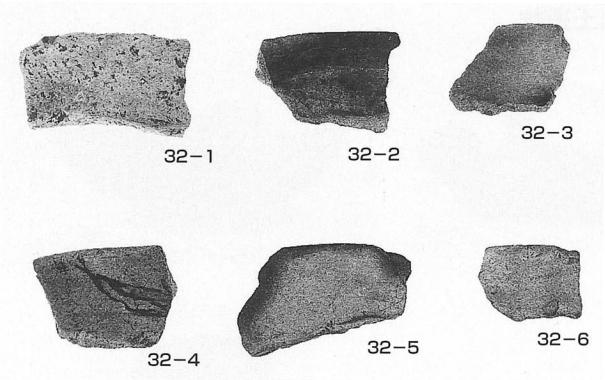

31−2

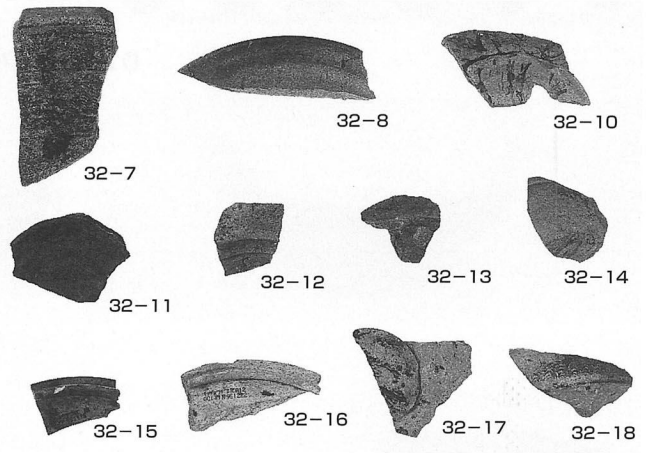

30−4 30−5 31−1


31−4 31−3 31−5

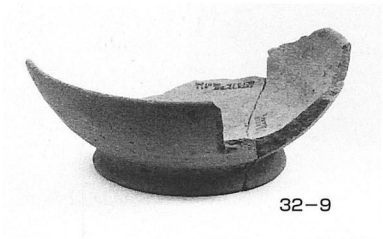

31−6 31−7

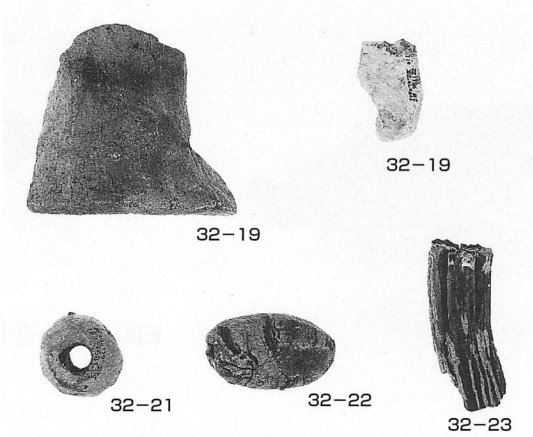
D区　土器群１出土遺物


32−1 32−2 32−3 32−4 32−5 32−6

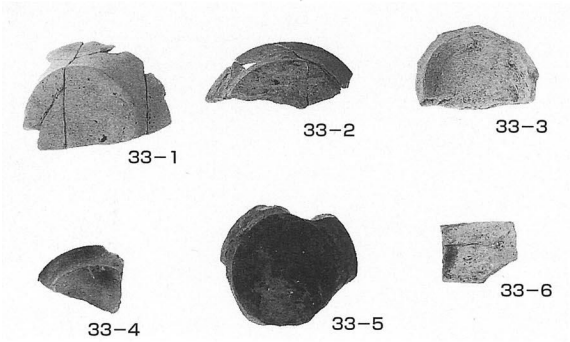

32−7 32−8 32−10 32−11 32−12 32−13 32−14 32−15 32−16 32−17 32−18

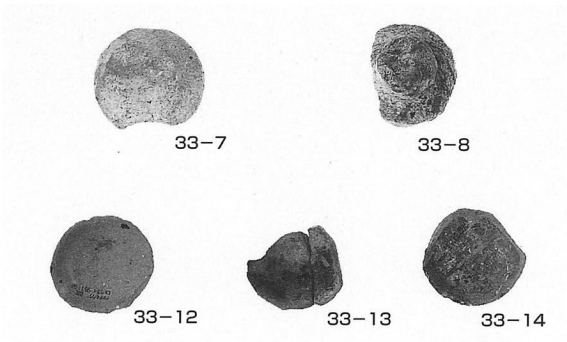
D区　遺構外出土遺物

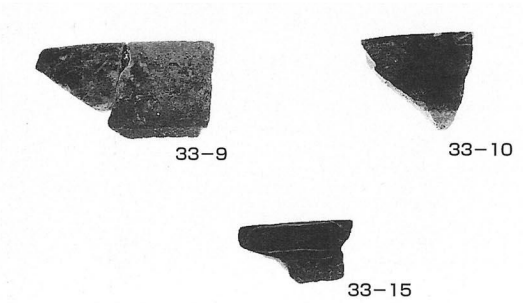

32−9

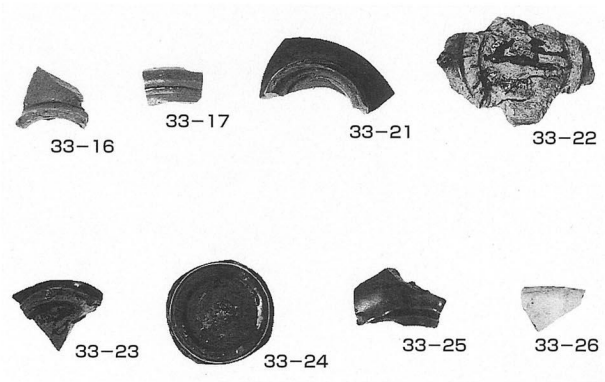

32−19
32−19
32−21
32−22
32−23

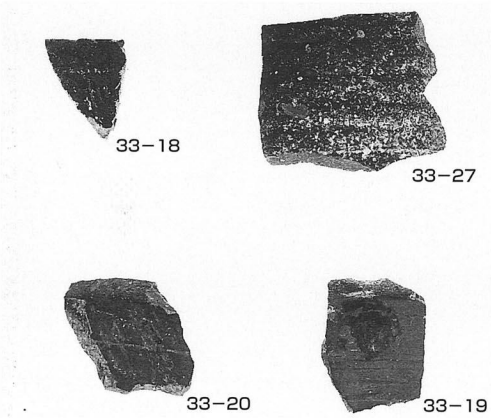
33−11

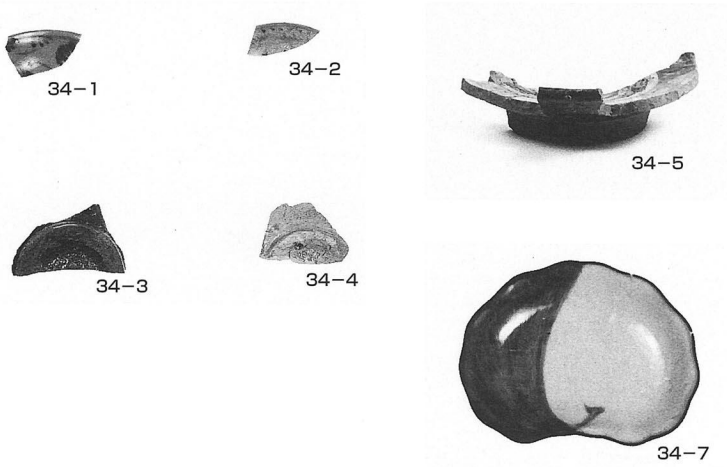

33−1
33−2
33−3
33−4
33−5
33−6

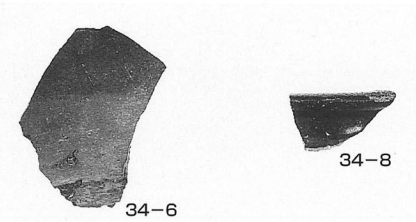

33−7
33−8
33−12
33−13
33−14


33−9
33−10
33−15


33−16
33−17
33−21
33−22
33−23
33−24
33−25
33−26

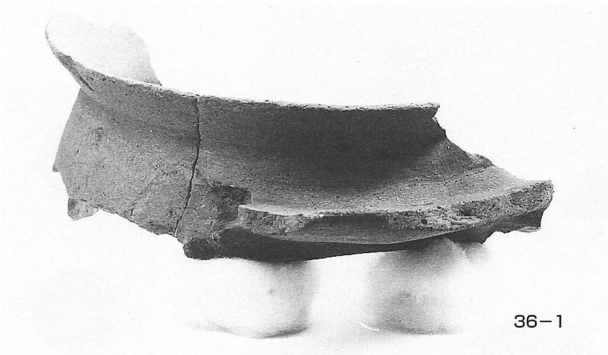

33−18
33−27
33−20
33−19

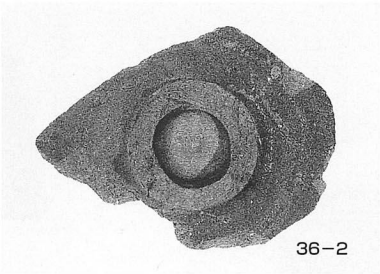

34−1
34−2
34−5
34−3
34−4
34−7


34−6
34−8

D区　遺構外出土遺物

図版 12





E区　出土遺物

出雲市駅前白枝線街路事業地内

壱丁田遺跡発掘調査報告書

平成10年（1998）3月

編集・発行　出雲市教育委員会
出雲市今市町北本町3丁目2－1

印刷・製本　㈲ワン・ライン
出雲市塩冶町1173－1